

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（45）

鹿児島県立国分高等学校浄化槽設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

もと お さと
本 御 内 遺 跡

2002年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、鹿児島県立国分高等学校浄化槽設置工事に伴って、平成11年5月10日から6月10日にかけて約1か月にわたり鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した本御内遺跡の発掘調査報告書です。

本御内遺跡は、鹿児島湾奥部国分平野の中央部に位置し、旧薩摩藩主島津義久によって築城された舞鶴城跡の一画にあり、弥生時代から近世までの遺跡として知られています。付近には大隅国の国府・国分寺も置かれていたところで、古くから大隅地方の中心地でもありました。

今回の調査では、古墳時代及び古墳時代以降の自然流路各1条や、古墳時代と中世の包含層に挟まれた古代の水田遺構が検出され、また、壺形土器完形品を含む古墳時代の成川式土器が多数出土し、新たな資料を提供してくれました。

本報告書が、南九州の歴史研究及び県民の皆様の文化財保護意識の高揚に役立つことができれば幸いです。

終わりに、この発掘調査にご協力いただきました県立国分高等学校・県教育庁学校施設課および地元の皆様に心から感謝いたします。

平成14年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

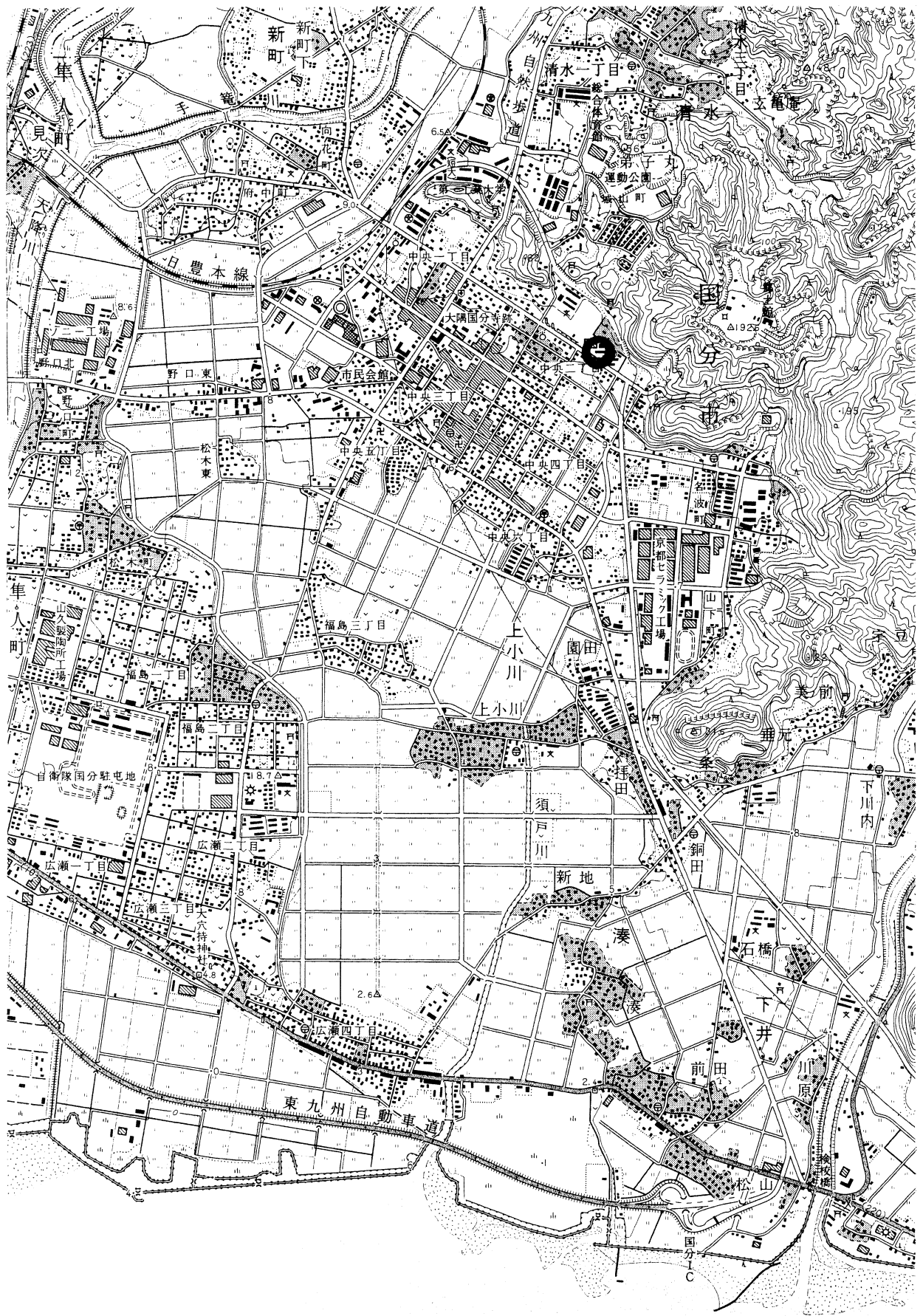
所 長 井 上 明 文

例 言

- 1 本報告書は、鹿児島県立国分高等学校浄化槽設置工事に伴う本御内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県国分市中央2丁目8-1に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県教育庁学校施設課の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査については、県立国分高等学校の協力を得た。
- 5 発掘調査にあたっては、日本考古学会会員である平田信芳氏に現地指導をいただいた。
- 6 挿図の縮尺は、各図ごとに示している。
- 7 遺物番号は、すべて通し番号であり、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
- 8 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 9 出土遺物の整理作業は、鹿児島県立埋蔵文化財センター整理作業員の協力で、遺物の実測・トレース・写真撮影は整理作業員の協力を得て西郷が実施し、中村耕治主任文化財主事、鶴田静彦文化財主事、山崎省一文化財主事、福永修一文化財研究員、横手浩二郎文化財研究員、栗山葉子文化財調査員、西吾意子文化財調査員、坂元恒太文化財調査員の協力を得た。
- 10 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する計画である。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	もとおさといせき							
書 名	本御内遺跡							
副 書 名	鹿児島県立国分高等学校浄化槽設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書 (45)							
シ リ ー ズ 番 号								
編 著 者 名	西郷吉郎							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899-5652 始良郡始良町平松6252番地 TEL0995-65-8787							
発 行 年 月 日	西暦 2002年, 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積 m ²	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
もとおさといせき 本御内遺跡	かごしまけん 鹿児島県 こくぶんし 国分市中 おうにちめ 央二丁目 8-1	46218	10-66	31度 44分 12秒	130度 46分 07秒	19990510 ~ 19990610	225	県立国分高 校浄化槽設 置工事に伴 う埋蔵文化 財発掘調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物			特 記 事 項	
本御内遺跡	散布地 城館跡	古代 古墳時代 弥生時代	水田 自然流路	成川式土器 弥生式土器				



付図 本御内遺跡の位置図（2万5千分の1）

本文目次

序文	
例言	
報告書抄録	
付図 本御内遺跡の位置図	
第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第II章 遺跡の位置と環境	4
第1節 遺跡の位置及び立地	4
第2節 歴史的環境	4
第III章 層位	11
第IV章 調査の概要	14
第1節 調査の概要	14
第2節 弥生時代の調査	15
第3節 古墳時代の調査	15
第4節 古代の調査	39
第V章 まとめ	40
符編	

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	8	第15図 出土遺物(3)	25
第2図 遺跡周辺地形図	9	第16図 出土遺物(4)	26
第3図 標準土層柱状模式図	11	第17図 出土遺物(5)	27
第4図 遺跡の層位(A区)	12	第18図 出土遺物(6)	28
第5図 遺跡の層位(B・C区)	13	第19図 出土遺物(7)	29
第6図 A区グリッド配置図	14	第20図 出土遺物(8)	30
第7図 弥生式土器	15	第21図 出土遺物(9)	31
第8図 溝状遺構	16	第22図 出土遺物(10)	32
第9図 溝内出土遺物(1)	17	第23図 古墳時代遺物分布状況	33
第10図 溝内出土遺物(2)	18	第24図 古墳時代遺物出土状況	34
第11図 溝上部出土遺物	19	第25図 水田遺構	39
第12図 柱穴	20	第26図 本御内遺跡	
第13図 出土遺物(1)	23	第1～5次の概要図	42
第14図 出土遺物(2)	24		

表 目 次

表目次

第1表	遺跡地名表	6
第2表	柱穴一覧表	21
第3表	土器観察表	35

図 版 目 次

図版1	1 B区土層断面(北側)	2 遺物出土状況	43
図版2	1 壺形土器出土状況	2 手づくね土器出土状況	44
図版3	1 水田遺構	2 水田遺構内足跡	45
図版4	1 溝状遺構及び遺物出土状況	2 溝状遺構完掘状況	46
図版5	1 植物珪酸体の顕微鏡写真(イネ)		
	2 植物珪酸体の顕微鏡写真(オオムギ族)		47
図版6	1 植物珪酸体の顕微鏡写真(ヨシ属)		
	2 植物珪酸体の顕微鏡写真(ススキ属型)		48
図版7	出土遺物(1)		49
図版8	出土遺物(2)		50
図版9	出土遺物(3)		51
図版10	出土遺物(4)		52
図版11	出土遺物(5)		53
図版12	出土遺物(6)		54
図版13	出土遺物(7)		55
図版14	出土遺物(8)		56
図版15	出土遺物(9)		57
図版16	出土遺物(10)		58

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育庁学校施設課（以下、学校施設課）は、県立国分高等学校（所在地 鹿児島県国分市中央二丁目 8-1）における浄化槽設置を計画し、県教育庁文化財課（以下、文化財課）に対して当該地域における埋蔵文化財の有無について照会した。

対象地は、周知の遺跡（舞鶴城）内に位置することや、平成10年度実施の試掘調査の結果から判断して、本地域が埋蔵文化財の包蔵地であることから、学校施設課と文化財課は、遺跡の取り扱いについて協議を行った。その結果、平成11年度に全面調査を実施して、埋蔵文化財の記録保存を行うことで、埋蔵文化財の保護と事業との調整を図ることとした。

発掘調査及び報告書作成は、県立埋蔵文化財センターが行った。

第 2 節 調査の組織

事業主体 鹿児島県教育庁学校施設課

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

（平成11年度・発掘調査）

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	課長補佐兼第 1 調査係長	新東 晃一
	〃	主任文化財主事	中村 耕治
調査担当者	〃	文化財主事	富田 逸郎
	〃	文化財主事	西郷 吉郎
調査事務担当	〃	総務課係長	有村 貢
	〃	主 査	今村 孝一郎

（平成13年度・整理報告書作成）

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
	〃	課長補佐	立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼第 1 調査係長	青崎 和憲
	〃	主任文化財主事	中村 耕治
調査担当者	〃	文化財主事	西郷 吉郎
調査事務担当	〃	総務課係長	前田 昭信
	〃	主 査	栗山 和己

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成11年5月10日（月）から6月10日（木）の間に実施した。整理作業及び報告書作業は、発掘終了後、平成12年11月に実施した。以下、日誌抄より発掘調査の経過を略述する。

5月10日（月）～5月14日（金）

埋蔵文化財センターから道具搬入。国分高校に発掘調査開始の挨拶。まず、浄化槽本体部分設置場所にあたる体育館西側部分＜A区＞（8m×15m）の掘り下げ調査から開始。重機を使用した表土の剥ぎ取りと並行して、作業員による廃土の仮置き場の確保や除草等、遺跡内の環境整備。表土の剥ぎ取り後、暗青灰色シルト層（Ⅱa層）上面の精査、終了後写真撮影。

5月17日（月）～5月21日（金）

＜A区＞ 暗青灰色シルト層～明茶褐色小礫層～明茶褐色粗砂・シルト層（Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc層）の掘り下げ作業。多数の土器片が出土するが、ほとんどが土石流などの影響でローリングを受けた成川式土器である。その後、暗茶褐色シルト層～黒色土（Ⅲa・Ⅲb層）の掘り下げ作業。遺物出土状況の写真撮影。その中に成川式土器完形品の壺形土器も出土。写真撮影後、実測。

また、特別教室棟横の汚物槽設置場所＜B区＞（4m×3.5m）及び、1年8組教室横の雑排水槽設置場所＜C区＞（2m×3m）の重機による表土剥ぎ。終了後、安全柵等の環境整備。

「教員の地域貢献事業」で 国分小学校・片岡祐子教諭（17日～19日）、国分高校・飯田考俊教諭、野口勉教諭、宮路真由美教諭（21日）が発掘調査に参加。

5月24日（月）～5月28日（金）

＜A区＞ 引き続き、黒色土の掘り下げ作業。壺等のミニチュア土器、甕の口縁部や壺の大型破片をはじめ多数の成川式土器が出土。平面実測及び遺物取り上げ作業。明黄褐色砂壤土層（Ⅳ層）上面の精査。2条の溝状遺構を検出。写真撮影。

＜B区＞ 掘り下げ作業（黒色土層）開始。

今週は、雨天及び作業場状態不良のため合計3日間作業中止。

「教員の地域貢献事業」では、国分高校・飯田考俊教諭、野口勉教諭、宮路真由美教諭（24日～25日）、青葉小学校・宇井知隆教諭（28日）、国分中学校・梅木敬一郎教諭、森武忍教諭、山口真由美教諭（28日）が発掘調査に参加。また、26日と28日に国分高校、27日と28日に国分南中の遺跡見学を実施。

6月1日（火）～6月4日（金）

＜A区＞ 2条の溝状遺構掘り下げ作業。溝状遺構完掘、精査、写真撮影。大型土器片やミニチュア土器等5点の写真撮影及び実測。

＜B区＞ 掘り下げ作業。黒色土層より成川式土器が少数出土。明茶褐色砂壤土上面で柱穴15基と多数の杭痕を検出。掘り下げ作業、写真撮影、実測。その後、埋め戻し。

＜C区＞ 明茶褐色粗砂・シルト層に覆われる形で水田遺構を検出。精査後、写真撮影、実測。

尚、2日に日本考古学協会会員である平田信芳氏に溝状遺構や水田遺構を中心に本遺跡内の遺構・遺物について指導・助言をいただく。

また、3日に遺跡周辺の高環境の復元等を目的として、(株)古環境研究所に自然科学分析を依頼。

今週は、雨天で1.5日作業中止。

「教員の地域貢献事業」では、青葉小学校・宇井知隆教諭（1日～2日）が発掘調査に参加。

6月7日（月）～6月10日（木）

<A区> 下層確認を兼ね、遺跡内の水抜き（雨天日が非常に多く水が溜まるため）のミニトレンチを数か所設定。土層断面図作成。写真撮影。10日に埋め戻し・清掃を実施。調査を終了。

<B区・C区> 埋め戻し後の清掃を実施。調査を終了。

作業用具・出土遺物等の整理を行い、埋蔵文化財センターに搬入。

国分高校に調査終了の報告、引渡し。

※平成12年度定期人事異動により富田文化財主事は転出。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置及び立地

本御内遺跡は、鹿児島県国分市中央2丁目8-1（大字上小川，字犬追馬場）鹿児島県立国分高等学校敷地内に所在する。

本遺跡の所在する国分市は、鹿児島県のほぼ中央部に位置し、東は福山町，北は財部・霧島町，西は隼人町に接し、南は鹿児島湾（錦江湾）を隔て、桜島を仰ぎ見る霧島山麓の国分平野を主体とする拠点都市である。本市は、日豊本線，国道10号線，220号線等交通の要衝に位置し、県都鹿児島市から約30km，川内市から約45km，鹿屋市から約45kmと地理的条件に恵まれてる上、鹿児島空港や九州自動車縦貫道，さらに東九州自動車道一部開通等交通アクセス手段の整備や、上野原テクノパーク構想等の計画・推進により、県下においても目覚ましい成長を遂げている地域であるといえる。

国分市周辺の地形は、北部から南東部に点在する始良カルデラ噴出物によるシラス台地，西部から南部に広がる国分平野の沖積低地，及び北東部の山地に三大別される。国分平野は、天降川，檢校川等の大小河川により形成された三角州や干拓地からなり、現在、県内では最も開発が進んでいる地域である。平野南東部には上野原台地がそびえ、そこに所在する上野原遺跡は、昭和61年・平成3年～9年まで発掘調査が行われ、調査の進展とともに全国的な注目を受けた。なお、出土品の一部は重要文化財に指定され、また遺跡の一部は国史跡に指定された。

本遺跡は、国分平野北東方向から市中心部を通り鹿児島湾に注ぐ天降川，檢校川に挟まれた山地の先端部と沖積平野との境界部分に位置し、海拔12mの標高を持つ。浄化槽設置予定地は、北部の舞鶴城の詰城であるとされている標高192.6mの「城山」及び、これに連なる小高い山と南部の舞鶴城築城の際に作られた堀で、現在も活用されている水路に挟まれた150mほどの緩やかな傾斜地にあり、水路以南も、住宅地と水田が広がる平地となっている。一方北部は、旧国鉄大隅線建設の際に裾部が拡張されたとはいうものの、間近に山がそびえ立っており、平成5年に遺跡周辺で起きた災害は記憶に新しいが、豪雨による土石流などの災害が古くから幾度となく起こっていたことも地層から判断でき、この地での生活に多大な影響を与えていたこともわかる。

また、当遺跡北西約400mの地点には、大隅国分寺址があり、その寺域の広がりやこれを取り巻く周辺状況の確認等、極めて重要な課題を持つ地域であると同時に、これまでの本御内遺跡（国分高校内）や北東約300mの地点にある妻山元遺跡の調査から、舞鶴城関連のみならず縄文・弥生・古墳時代等、各時代を通して遺跡が密に立地する地域でもある。

第2節 歴史的環境

国分市は、大隅国の国府が置かれ、国分寺等も造られた場所であるため奈良・平安時代以降の遺跡が中心とされていたが、国分テクノポリス構想に基づく開発等により、多くの発掘調査が行われ平成11年現在でも70以上もの遺跡が調査・報告されている。第1図および第1表は、本遺跡周辺の遺跡分布図である。

旧石器時代の遺跡については、現在のところ報告はないが、隣接の福山町や財部町などで発見さ

れていることから、今後の調査での発見に期待が持たれる。

縄文時代では、上野原遺跡、平楯貝塚、中囲貝塚、妻山元遺跡、城山山頂遺跡、鍛冶屋馬場遺跡等、県内には事例が少ない貝塚や多くの遺跡が発見されている。上野原遺跡では、縄文時代早期の貴重な遺構・遺物が発見された。52基の竪穴住居や16基の連穴土坑をはじめ、数多くの集石や土坑等の遺構、また前平式・平楯式・塞ノ神式土器そしてこの時期には全国的には珍しい壺形土器や西日本最古の土偶等の遺物である。平楯貝塚は、平楯式土器の標式遺跡として著名である。城山山頂遺跡では、包含層は確認されなかったものの、早期の前平式・吉田式等の土器片が出土している。中囲貝塚でも、早期の押型文土器が出土している。前期では、先述の上野原遺跡から、曾畑式土器も出土している。名波B遺跡では、中期の阿高式土器の採集が報告されているが詳細は不明である。鍛冶屋馬場遺跡では、後期の市来式土器が、妻山元遺跡では、晩期の黒川式土器がそれぞれ出土している。晩期の遺構としては、上野原遺跡からも掘立柱建物跡1基がドングリピット4基に伴って検出された。

弥生時代の遺跡では、本御内遺跡（平成5年度調査）において、弥生時代後期と推定される住居跡の検出、破砕鏡の出土があり、東部九州との交流を裏付ける資料となっている。また、上野原遺跡においても、中期後半から後期前半の山ノ口式土器等が間仕切りを持つ竪穴住居跡や棟持ち柱付き掘立柱建物跡とともに出土している。そのほか、山下A遺跡、園田遺跡、弟子丸A～D遺跡、口輪野遺跡等で遺物の発見が報告されている。

古墳時代の遺跡は、比較的多く、市内の至る所に分布している。亀ノ甲遺跡では、4基の土坑が検出され、鉄製太刀等が出土している。また、台地上に位置する城山山頂遺跡からは、43基の住居跡や、成川式土器とともに、畿内地方で見られる布留式土器に酷似した土器が出土しており、南九州と畿内勢力との関わりを知る手がかりともなっている。また、そのすぐ麓にある妻山元遺跡からも住居跡が見つかった。

奈良・平安時代は、当地に大隅国の国府が置かれ、国分寺が造られたことにより、数多くの遺跡が存在する。その中の、鍛冶屋馬場遺跡や国府（小路）遺跡は、大隅国分寺跡に隣接していることや、布目瓦等の出土遺物から、その寺域を知るための重要な手がかりとなる遺跡である。また、本御内遺跡（平成4・5年度調査）でも当時のものと考えられる溝状遺構が検出されており、併せて国分寺との関連が考えられる。一方、大隅国府の所在地は、府中に置かれたとする見方があり、岡見山遺跡等も関連のある遺跡と考えられている。しかし、計画的な調査は行われておらず、今後の調査研究が期待される。

江戸時代の遺跡では、舞鶴城跡がある。この城は、慶長9年（1604年）島津義久により築城され、別名を国分新城と呼称する。城構えは、天守閣を持たない館造りで、山麓に平時の居館を構え、背後の山を非常時の詰城とする形である。現在の城山がこれに当たる。

《文献》

- ① 国分市教育委員会「妻山元遺跡」国分市埋蔵文化財調査報告書（1）1985
- ② 国分市教育委員会「城山山頂遺跡」国分市埋蔵文化財発掘報告書（2）1985
- ③ 国分市教育委員会「国府（小路）遺跡」国分市埋蔵文化財発掘報告書（5）1990

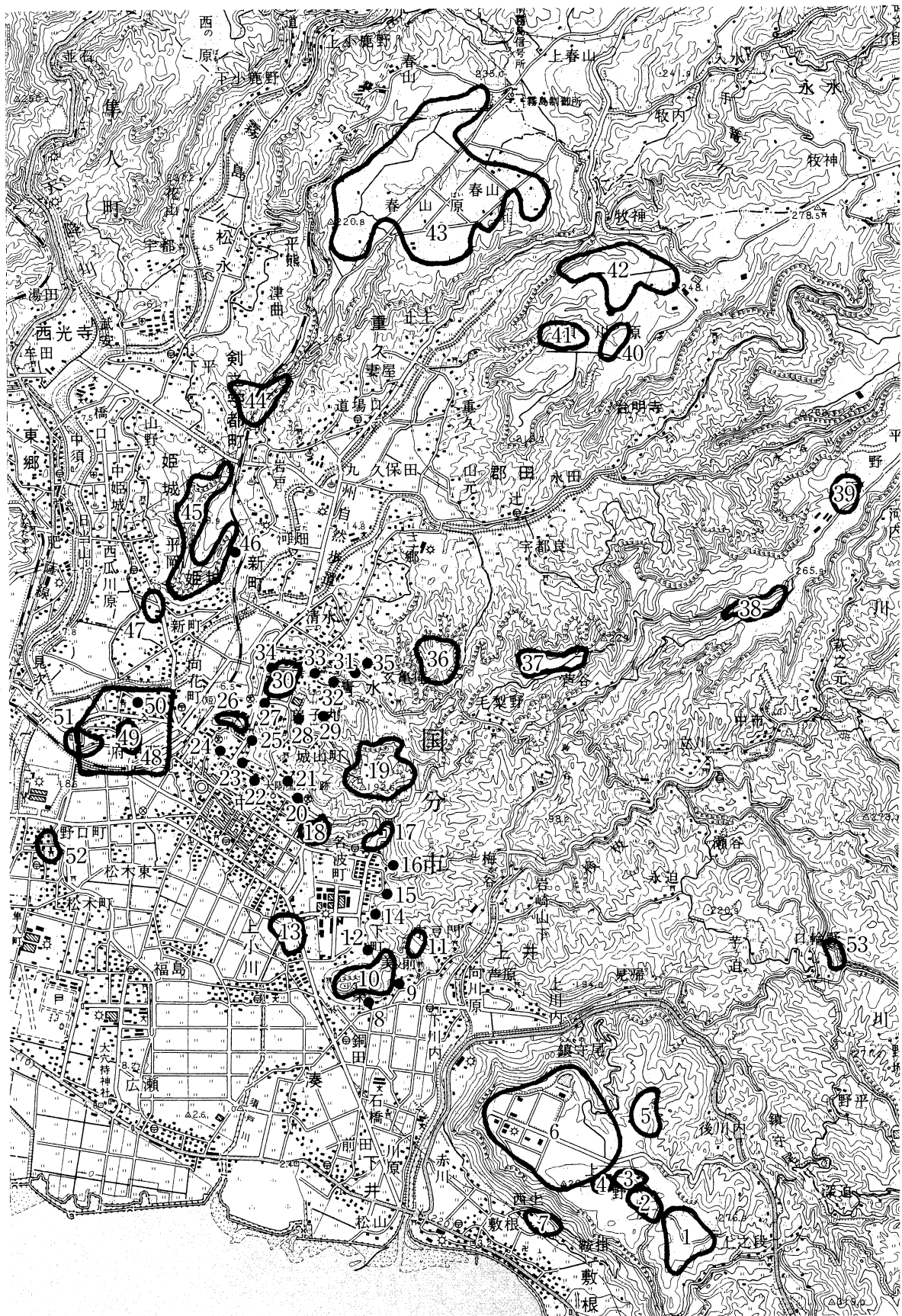
- ④ 吹上町教育委員会「辻堂原遺跡」吹上町埋蔵文化財発掘報告書 1977
- ⑤ 鹿児島県教育委員会「外川江遺跡 横岡古墳」
鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書 (30) 1984
- ⑥ 鹿児島県立埋蔵文化財センター「本御内遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財発掘報告書 (12) 1994
- ⑦ 鹿児島県立埋蔵文化財センター「本御内遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘報告書 (14) 1995
- ⑧ 鹿児島県立埋蔵文化財センター「本御内遺跡Ⅲ」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘報告書 (21) 1997
- ⑨ 鹿児島県立埋蔵文化財センター「上野原遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘報告書 (27) 2000

第1表 遺跡地名表

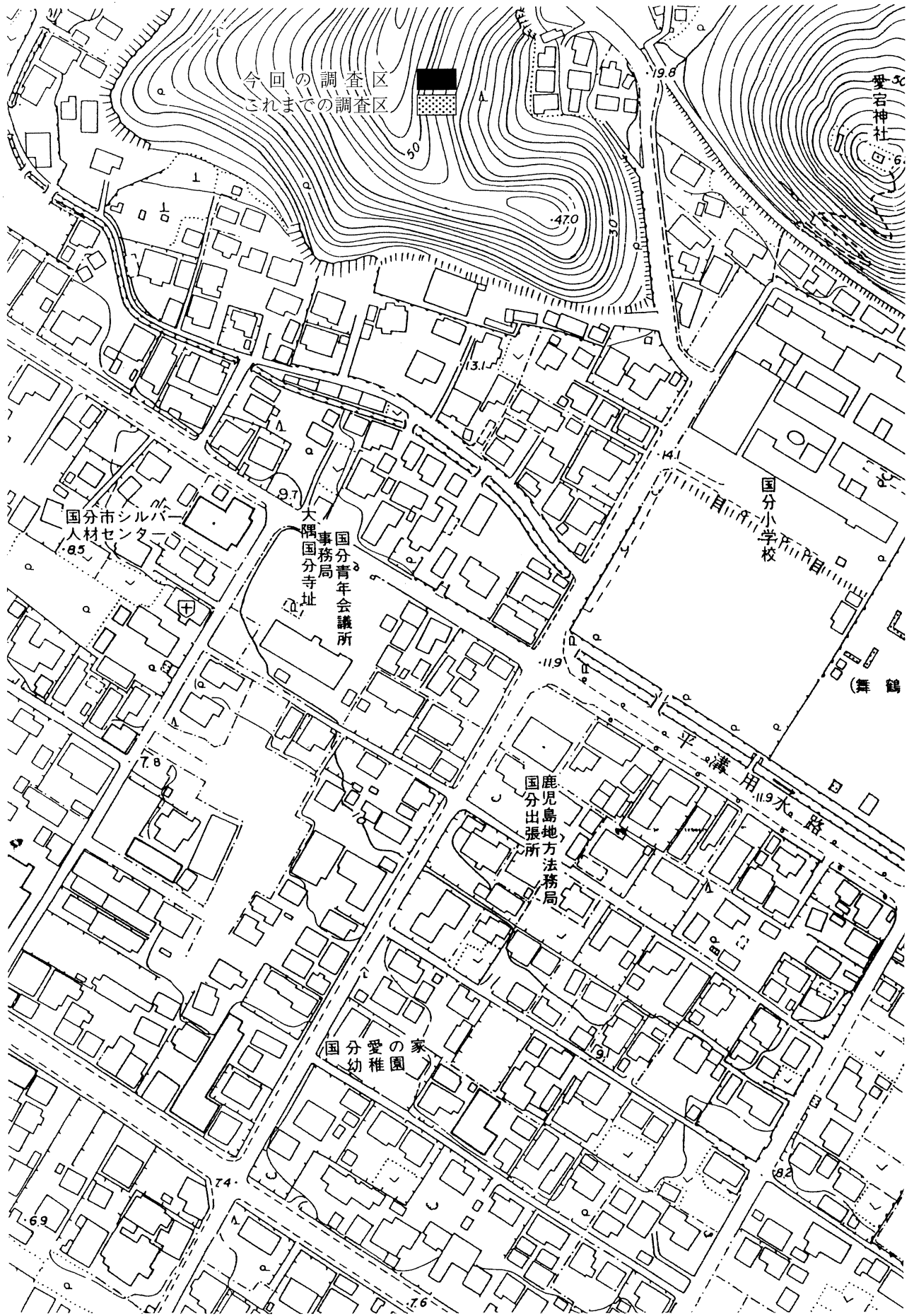
〔凡例 縄；縄文，弥；弥生，古；古墳，歴；奈良・平安，中世；鎌倉・室町〕

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	藤ヶ尾	上之段藤ヶ尾	古	成川式・土師器
2	中原	上之段中原	古	成川式・土師器
3	水ヶ迫	上之段水ヶ迫	古	成川式・土師器
4	堂ヶ尾	上之段堂ヶ尾	古	成川式
5	鍋迫	上之段鍋迫	縄・古	成川式
6	上野原	上之段水ヶ迫他	縄・弥・古	
7	大王坂	敷根大王坂	古・歴	土師器・青磁
8	平楯貝塚	上井一条	縄(早)	昭和46年川口貞徳氏調査，平楯式
9	中囲貝塚	上井一条	縄(早)	押型文・石器・人骨等
10	上井城跡	上井一条	中世	『国分擬古記地誌』
11	桶脇	桶脇	古	土師器・成川式
12	山下A	山下町鎮守	弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
13	園田	上小川園田	弥	土器
14	山下B	山下町高田字都	古	昭和55年新田栄治氏調査，土師器片
15	名波A	名波町小波谷	弥・古	〃 土器，土師器片
16	名波B	名波町小平原	縄・古	〃 土器，土師器片
17	大平	上小川大平	弥	土器
18	妻山元	中央2丁目	縄・古	昭和59年国分市調査，黒川式・成川式・須恵器
19	城山山頂	上小川新城	縄・古・歴	昭和52,53年国分市調査，吉田式・土師器・須恵器

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
20	本御内	中央2丁目	弥・古	土器・水田・住居跡・破碎鏡
21	舞鶴城跡	中央2丁目	近世	石垣・島津義久居城
22	大隅国分寺跡	中央1丁目	歴	瓦・層塔, 自然形塔婆
23	加治屋馬場	中央1丁目	縄・歴	昭和62年国分市調査
24	国府(小路)	中央1丁目	歴	昭和63年国分市調査, 瓦片
25	坂下	中央1丁目	歴	瓦窯跡・瓦片
26	鼻連山城跡	中央1丁目	中世	
27	清水A	清水堤田	縄・弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
28	清水B	清水トチメ田		◇
29	清水C	清水九万田	弥・古	◇
30	智尾岡	弟子丸乳尾	弥(後)	土器・勾玉出土・『清水村史』
31	弟子丸A	清水平等寺	弥・古	昭和55年新田栄治氏調査, 土器・土師器
32	弟子丸B	清水溜池	弥・古	◇ 土器・土師器
33	弟子丸C	清水寺馬場	弥・古	◇ 土器・土師器
34	弟子丸D	清水畑井田	弥・古	◇ 土器・土師器
35	玄亀庵	清水玄亀庵	弥・古	
36	清水城跡	清水外城	中世	山城・禿倉・通路
37	白蔵原	川原白蔵原	古	成川式・土師器
38	鷹原	川原鷹原	古	成川式
39	下外戸	川原下外戸	古	成川式
40	白蔵原	重久白蔵原	古	成川式・土師器
41	立山原	重久立山原		
42	星熊原	重久星熊原	古	成川式・土師器
43	内野々	重久内野々	縄・古	土器・成川式・須恵器
44	橘木城跡	重久吉永	中世	骨壺・経筒・禿倉・墓・『東襲山村史』
45	姫城城跡	姫城城山	中世	山城
46	竹下	姫城竹下		土師器
47	こがの社	姫城木ヶ森	弥	
48	大隅国府跡	府中亀甲	歴	瓦
49	岡見山	府中塚脇	弥・歴	昭和59年国分市調査, 土器・瓦
50	亀ノ甲	府中亀甲	古	昭和29年寺師見国氏調査, 土師器・須恵器
51	気色の杜	府中天神坊	弥	土器・石斧・祭器
52	弥勒寺	野口弥勒寺	古	成川式
53	口輪野	川内口輪野	弥	



第1図 周辺遺跡分布図



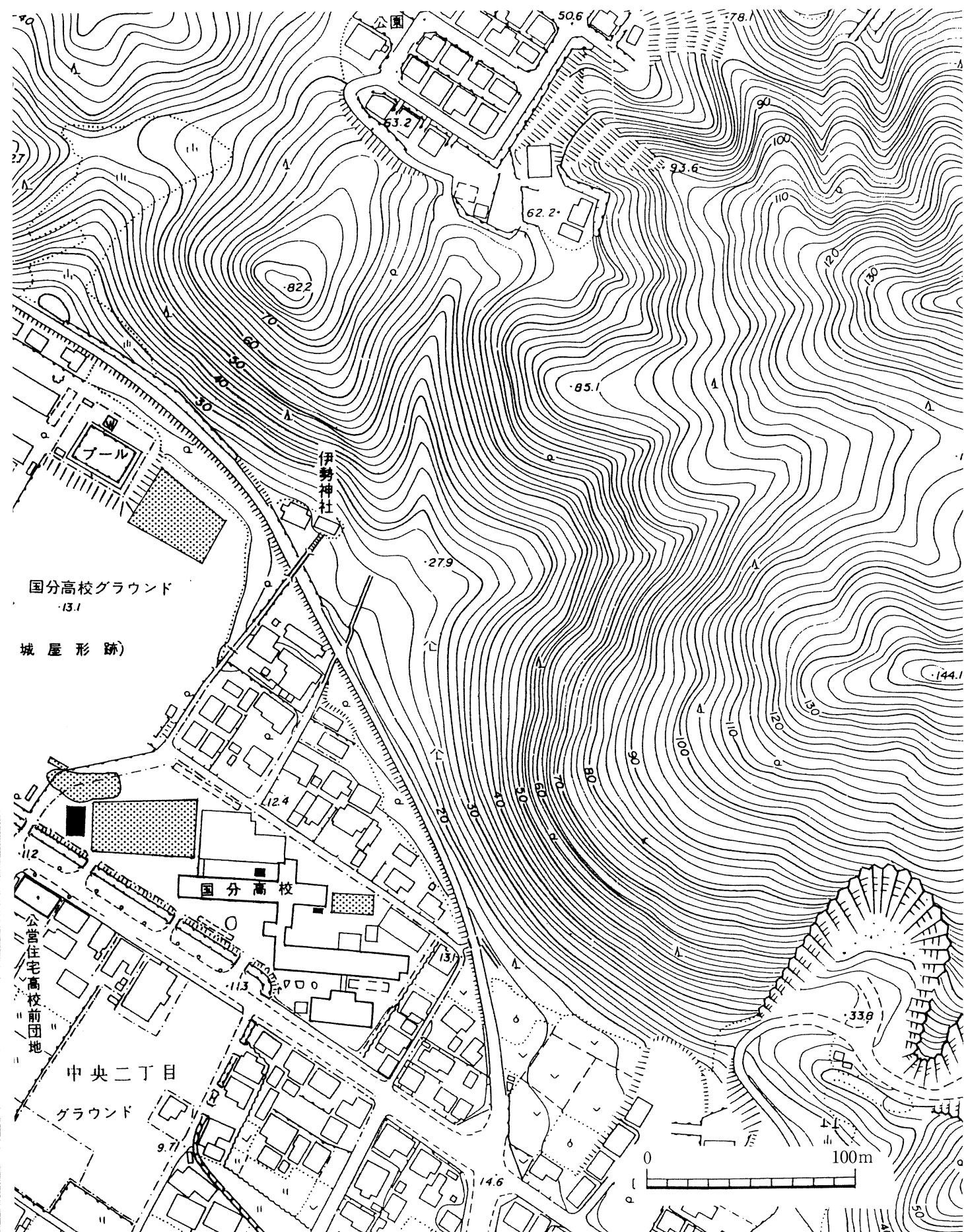


図 遺跡周辺地形図

第Ⅲ章 層 位

本調査地点の層位は、学校建設にかかわる盛土層と田土、水成作用によると思われる砂礫層等からなる。各層の堆積状況は、一部明瞭でないところもあるが、調査区全体を通して普遍的に広がる層位となっている。また、2m程度掘り下げると湧水があり、地下水位が高いこともわかる。ここでは、B区の層位を基準として、A区、C区の層位と比較しながら、各層について述べる。

I層 表土。堆積状態で5層に分層した。

I a層は、学校建設による盛土層を覆った碎石にシラスを混ぜたアスファルト層である。

I b層は、明茶褐色壤土の盛土層である。

I c層は、灰茶褐色壤土の耕作土層である。ところどころに桜島P1が見られる。

I d層は、灰茶褐色壤土の耕作土層である。

I e層は、I b層と似た明茶褐色壤土であるがやや暗い。含水率の差によると思われる。

II層 堆積状態で3層に分層した。

II a層は、グライ化し、シラスや小礫を含んだ暗青灰色シルト層である。田土であり、下部に沈殿した鋤床層が見られる。

II b層は、1~10mmの小礫を多量に含んだ明茶褐色小礫層である。土石流堆積物と思われる。

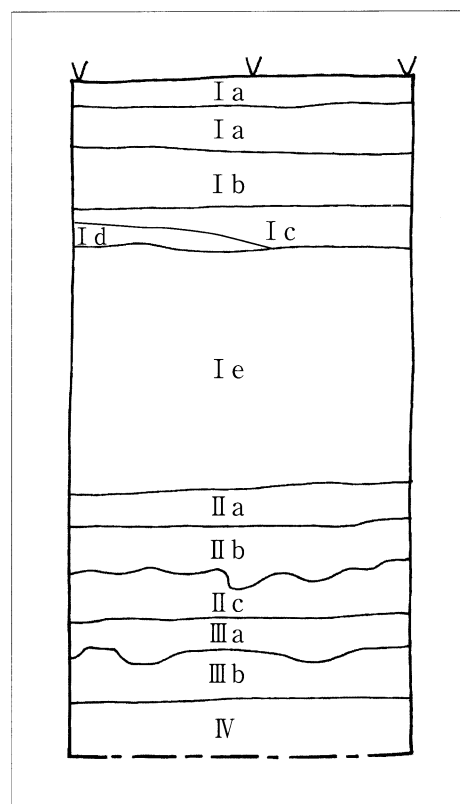
II c層は、明茶褐色粗砂とシルト層がクロスラミナ状に堆積している層である。この層も、II b層同様に土石流堆積物と思われる。

III層 堆積状態で2層に分層した。

III a層は、下位の黒色土がグライ化した暗茶褐色のシルト層である。C区では、上面で水田遺構が検出された。

III b層は、黒色土で成川式土器の包含層である。

IV層 固くしまった明茶褐色砂壤土である。上面で、2条の溝状遺構や柱列、杭痕が検出された。

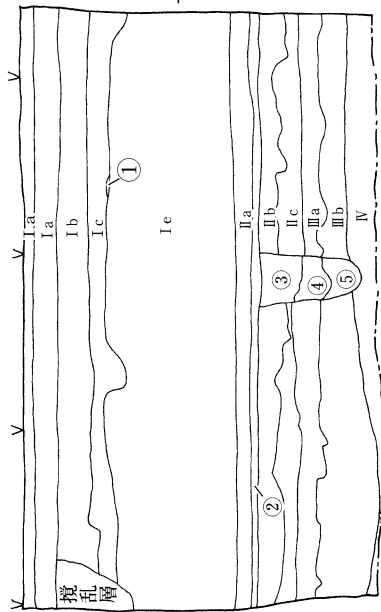


第3図 標準土層柱状模式図

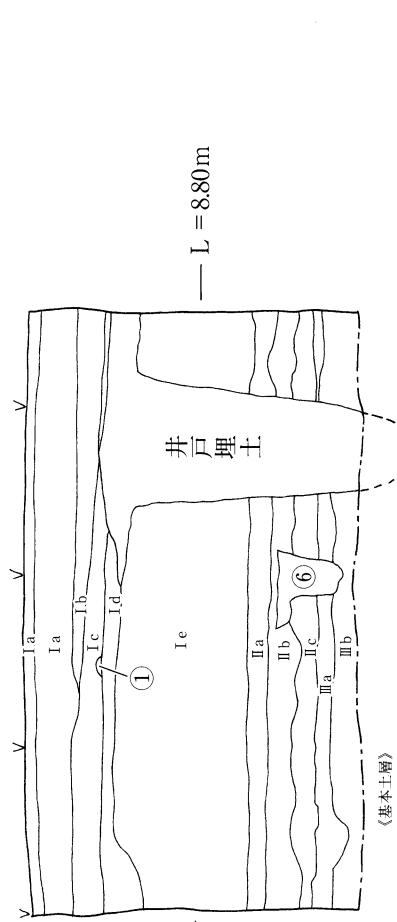


第4図 遺跡の層位 (A区)

(B区・西壁)



(B区・東壁)



- ① 校島P1
- ② 脚床層
- ③ 柱穴A (暗茶褐色砂壤土・砂に近い)
- ④ ♪ (暗茶褐色砂壤土・IIcを母材)
- ⑤ ♪ (黄褐色砂・IIcを母材)
- ⑥ 柱穴B (分層不可, 暗茶褐色砂壤土, ただし下部に黄褐色砂)
- ⑦ 砂利+砂

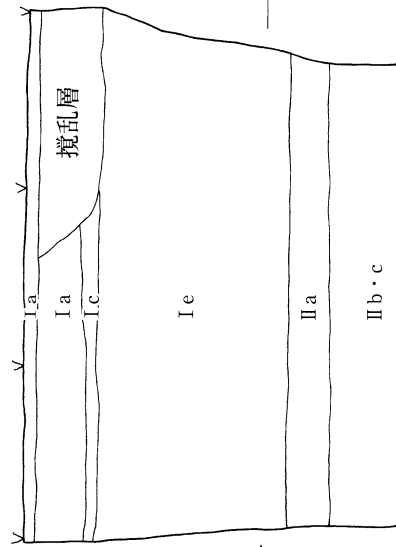
《基本土層》

- Ia アスファルト+碎石+シラス
- Ib 明茶褐色壤土
- Ic 灰茶褐色壤土 (校島P1含む)
- Id 灰茶褐色壤土
- Ie 明茶褐色壤土 (Ibよりやや暗い)
- IIa 暗茶灰色シルト (シラス, 小礫を多く含む, 下部はシルト沈殿した脚床層)
- IIb 明茶褐色小礫 (1~5mmの礫を多量に含む)
- IIc 明茶褐色細砂・シルト
- IIIa 暗茶灰色シルト
- IIIb 黒色土 (成川式土器包含層)
- IV 明茶褐色砂壤土

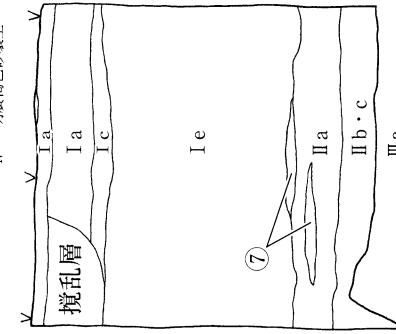
第5図

遺跡の層位 (B区・C区)

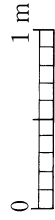
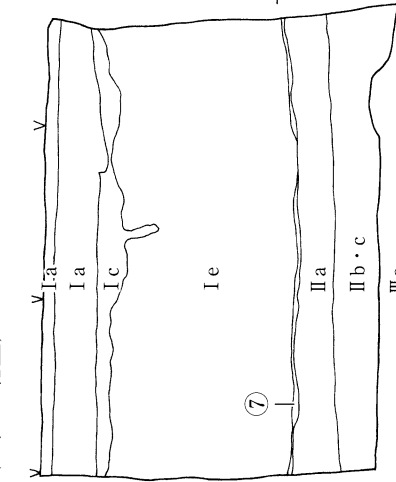
(C区・南壁)



(C区・西壁)



(C区・北壁)



第IV章 調査の概要

第1節 調査の概要

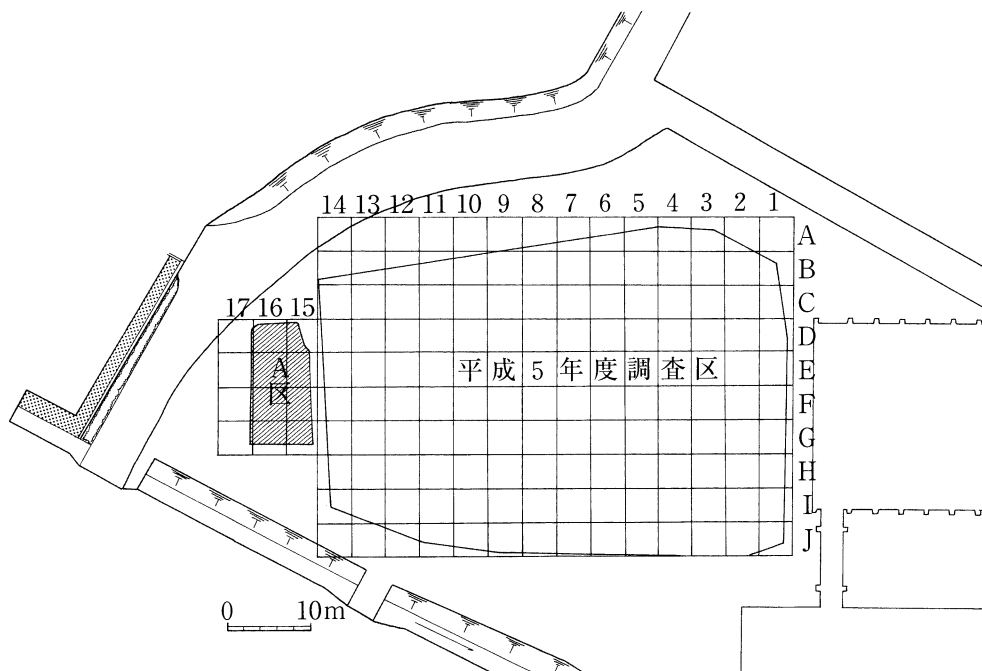
発掘調査は、体育館西側の浄化槽、および特別教室棟南側の汚物層、1年8組教室南側の雑排水層の3か所の設置予定地で行った。便宜的に体育館西側調査区をA区、特別教室棟南側調査区をB区、1年8組教室南側調査区をC区とし、A区は、4m×4mの小グリッドを設定した。グリッドは、平成5年度の体育館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の際に設定したものを利用して調査を行った。

表土は戦後の学校建設による盛土層であるため、遺構や遺物の存在する可能性がないものと判断し、重機を利用して表土を剥ぎ取り、その後、人力によってII層以下の掘り下げを行い、遺物の確認や遺構の検出を行った。

II層は、A区より多数の土器片等が出土したが、ほとんどが土石流等の影響でローリングを受けた成川式土器であった。また、下部に鋤床層をもつ水田の存在も土層から確認できた。B区では、II層b層上面で、埋土内に炭化物を含む柱穴が検出された。C区においては、攪乱が激しく遺物の出土はなく、遺構も検出されなかった。

III層は、A区の黒色土層中から成川式土器完形品の壺やミニチュア土器等含む多数の土器が出土した。また、B区からも少量であるが成川式土器片が出土した。一方、C区からは、II層cシルト層に覆われる形で水田と対になった畦と溝が各2条検出された。

IV層では、上面においてA区から、古墳時代と古墳時代以降に相当すると思われる各1条ずつの溝状遺構が検出された。B区においては、同じく上面において、柱穴15基と多数の杭痕が検出された。



第6図 A区グリッド配置図

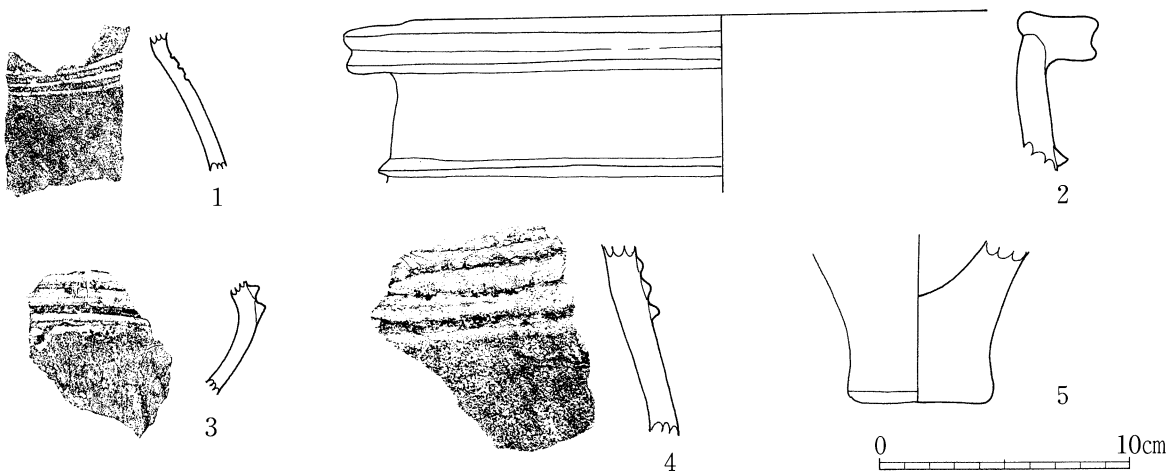
第2節 弥生時代の調査

1 遺構

今回の調査では、弥生時代に関する遺構は認められなかった。

2 遺物（第7図1～5）

Ⅲ層内より出土する多量の成川式土器の中に、数点ではあるが弥生式土器が出土している。1は、篋書文を有する弥生時代前期の壺形土器で、肩部に篋を用いて丁寧に平行沈線文を施している。2は弥生時代中期の甕形土器で、口縁部が逆L字状に外反するものである。口縁部は端部に凹みがあり、張り付けによるものである。胴部上位に三角形貼付突帯を有している。3～4は弥生時代中期の壺形土器で、3は胴部最大径部分に二条の突帯を有するものである。4は肩部に三角形貼付突帯が三条廻らされている。ヘラ磨き調整が施される。5は、弥生時代中期の甕形土器の底部で充実した脚台である。裾はあまり広がっていない。



第7図 弥生式土器

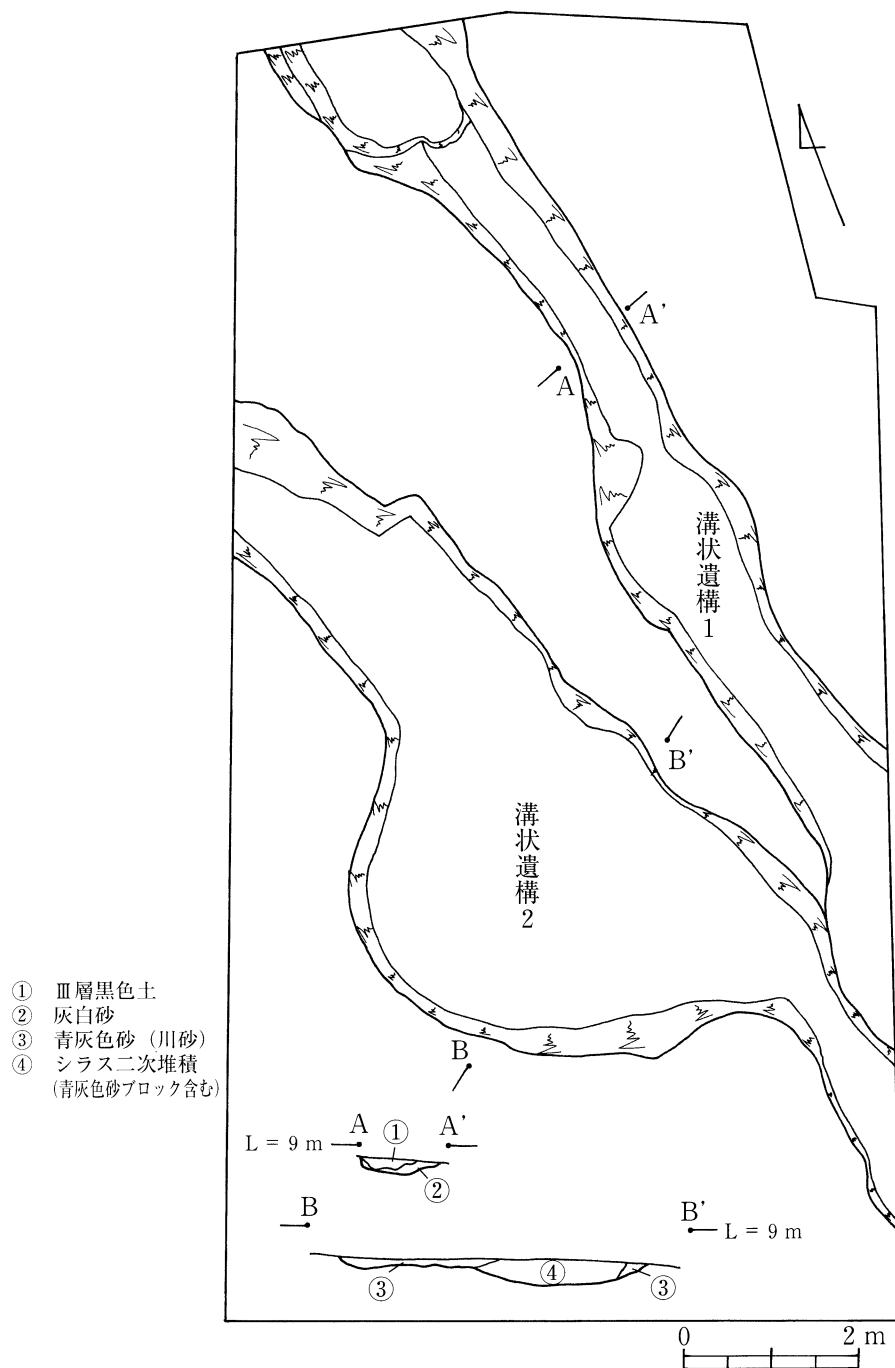
第3節 古墳時代の調査

1 遺構

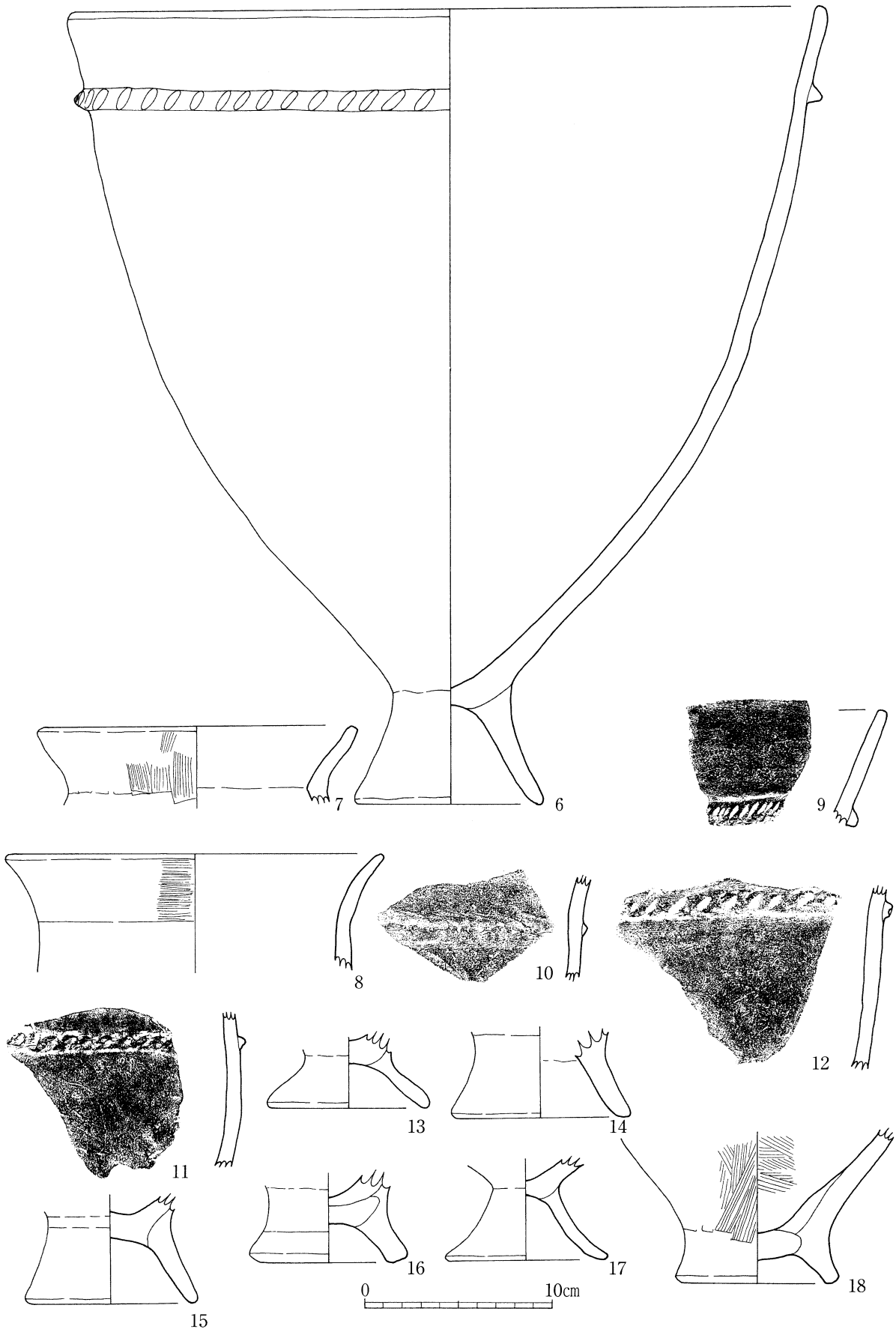
溝状遺構

体育館西側調査区（A区）Ⅳ層上面から、北から南へ走る2条の溝状遺構が検出された。溝状遺構1の幅は、80cmから、広い部分では2m程度の箇所もあり一定していない。深さは25cm前後で、Ⅳ層を掘り込んでいるが、深いところでは黒褐色砂（Ⅴ層）下の明茶褐色砂壤土（Ⅵ層：Ⅳ層と同じ）まで掘り込んでいるところもある。埋土は、Ⅲ層の黒色土と灰白砂の2層からなっている。下部に硬化面もなく、溝の幅も一定でないところから自然流路と判断した。埋土中からは、成川式土器片が出土しており、古墳時代の遺構と考えられる。一方、溝状遺構2も、幅は一定しておらず、70cm～2mあり、淀み部分と思われる場所では最大3.5mほどの幅

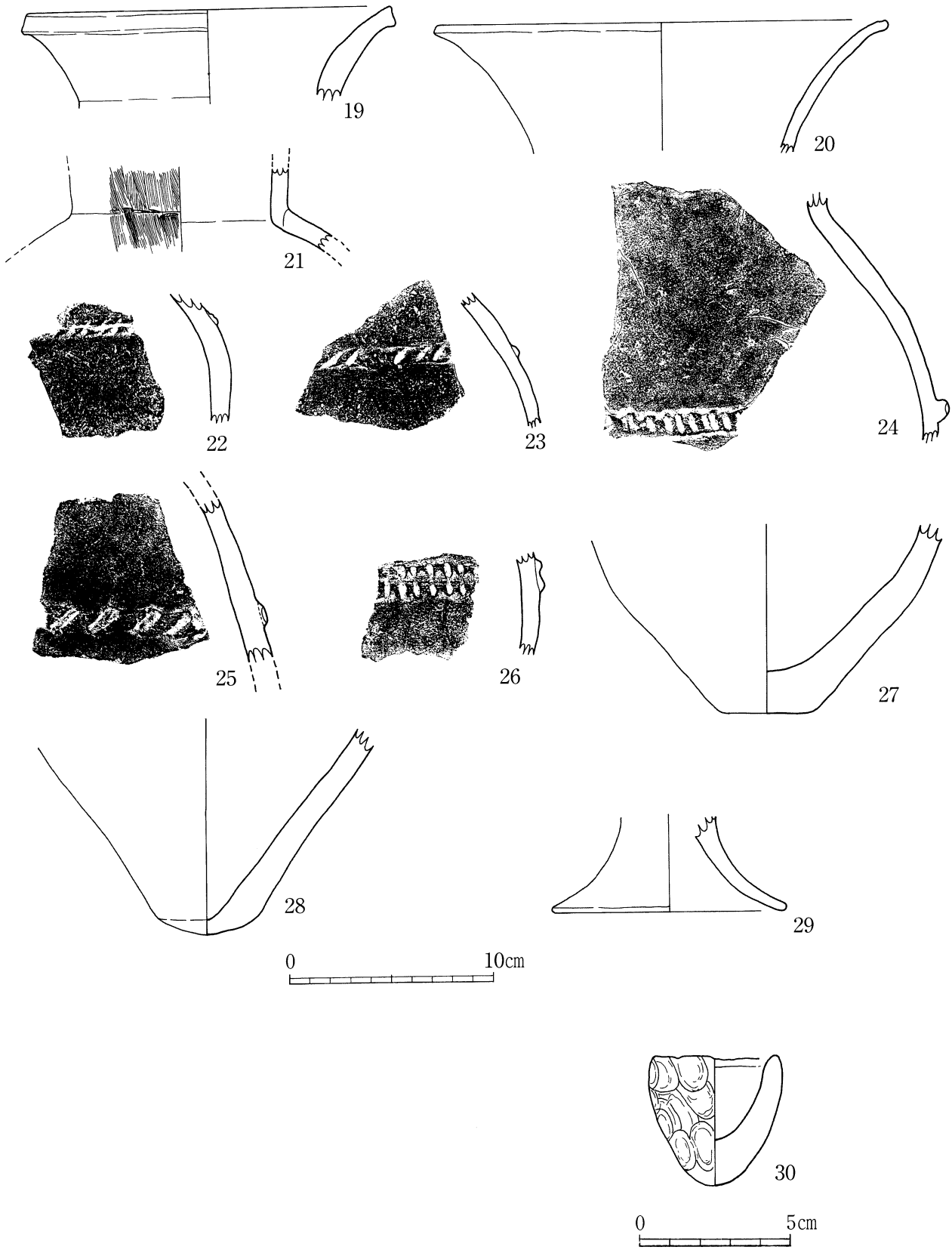
がある。深さは10cm程度だが、淀み部分では30cmほどある。埋土は、淀み部分に関しては、青灰色砂ブロックをとところどころに含んだシラス二次堆積で、その他の部分では青灰色砂に覆われていて、遺物はほとんど出土しなかった。また、溝状遺構1を切っていることから、溝状遺構1より新しい時期の自然流路だと考えられる。



第8図 溝状遺構



第9図 溝内出土遺物(1)甕形土器



第10図 溝内出土遺物（2）壺 高坏，手づくね土器

溝状遺構内出土遺物

2条の溝状遺構内から出土した遺物（大部分は溝1内である）は、成川式土器がほとんどを占めており、ローリングを受けたものも多かったが、その中から摩耗の少ない特徴的な成川式土器を25点図化した。

甕形土器（第9図6～18）

6は口縁部が直立気味に外反するだけで、胴部もそれほど張らずになだらかに底部へつながっている。体部の割に脚台が小さく、脚台の開きもほぼ直である。頸部には、刻み目突帯を廻らす。復元高は約42cm、復元口縁径は40cmである。7～9は口縁部で、いずれも口縁部がやや外反するものである。7は頸部から口縁部にかけて、ハケ目のカキ上げが認められる。8は横位のナデ調整が施される。9は頸部に刻み目突帯を廻らす。10～12は、頸部に突帯を有するもので、10は刻み目のない小さめの三角突帯、11、12は刻み目を有する台形に近い突帯である。13～18は、脚部で高いものと低いもの、裾が広がるものと直に広がるもの等に分かれる。13、17は器壁が薄い裾広がり脚で、18は低い脚台で、器壁も厚く鉢形土器に近い。16、18は、底部に円盤状の土台を用い、そこから脚部や胴部を継ぎ足し製作しているのがわかる。

壺形土器（第10図19～28）

19、20は外反する口縁部である。19は器壁が厚く、20は口縁部が長い。大形の壺形土器と思われる。21は頸部で、外面には丁寧なハケ目調整、内面にはナデ整形がされており、口縁部が直行気味に立ち上がる。22～26は、肩～胴部に突帯を廻らすもので、22～25は一条、26は二条持ち、それぞれ刻み目を有している。22は突帯の中央に凹線を入れた後、刻み目を入れている。24は半円の、25は台形のやや幅の広い突帯に刻み目を入れている。また、25の突帯上部には、黒色の異班が見られる。27、28は底部である。胴部から底部にかけて、27はなだらかにすぼまる平底、28はまっすぐにすぼまる丸底気味の平底になっている。

高坏形土器（第10図29）

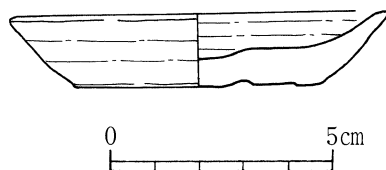
29は高坏の脚部である。なだらかに裾部へ広がる。外面、内面ともにナデ調整が施されている。

手づくね土器（第10図30）

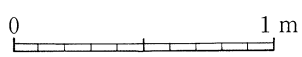
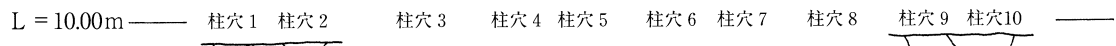
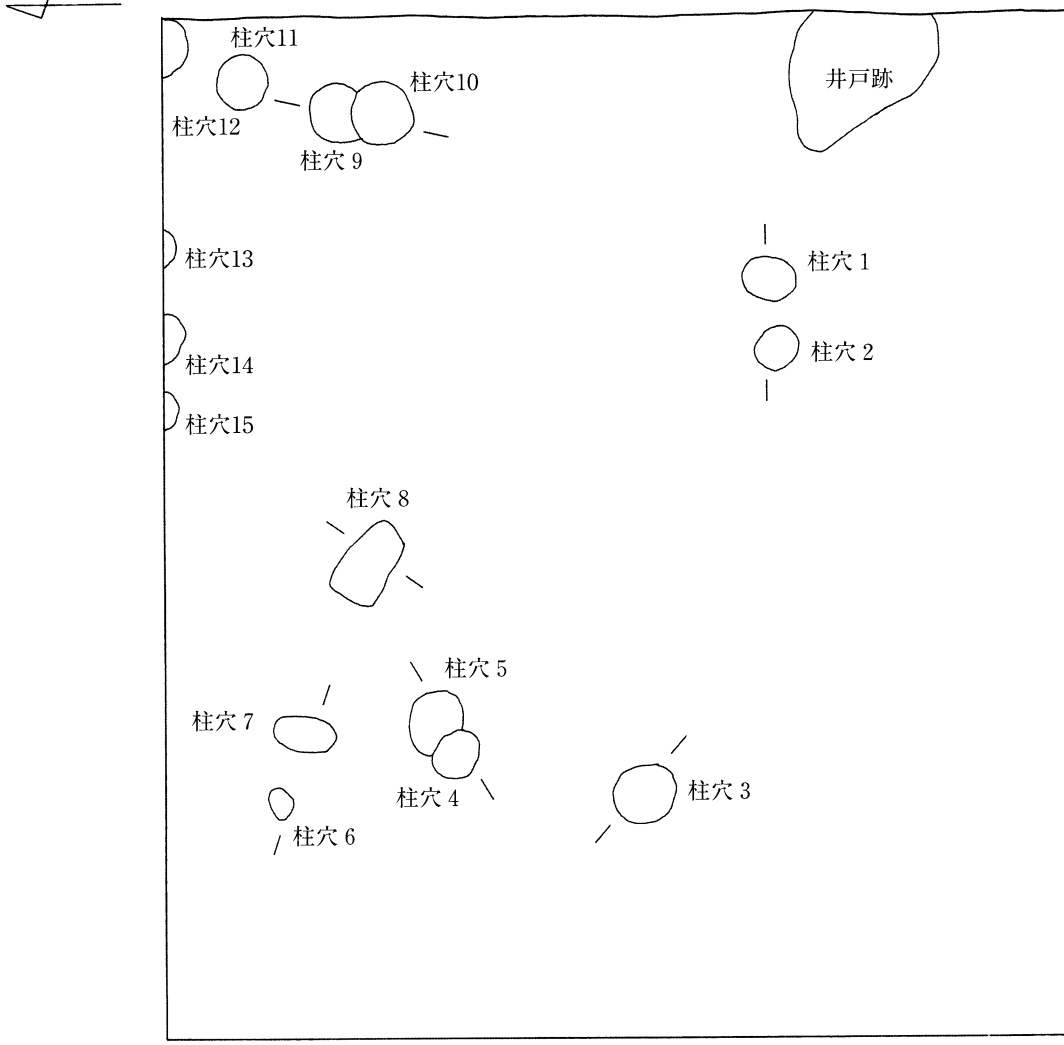
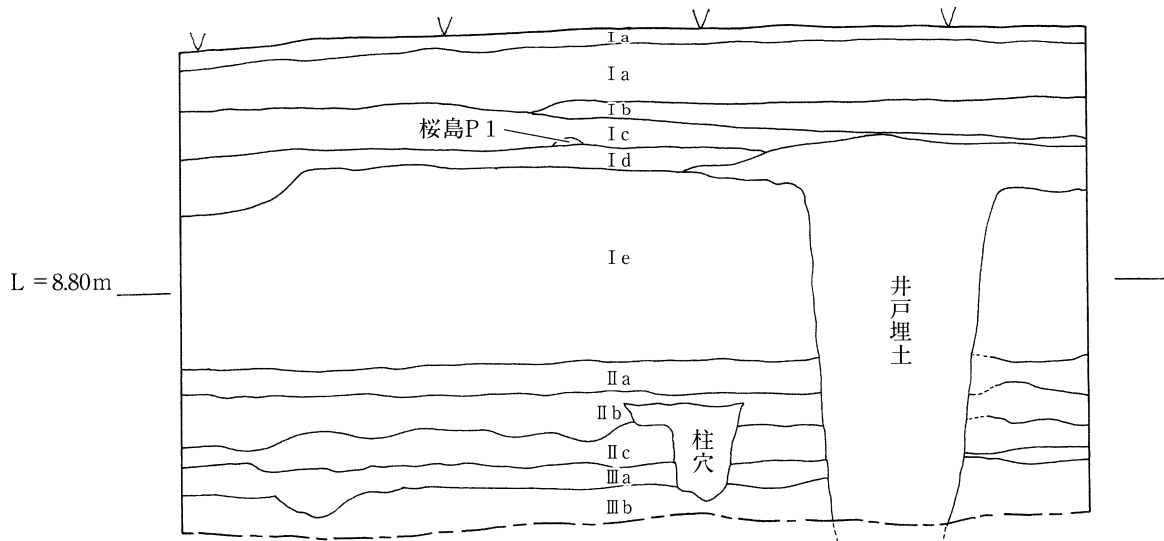
30は直径4cmほどの手づくね土器で、指頭による調整痕が残る。

土師器（第11図31）

31は溝上部より出土したもので、回転ヘラ切りの皿である。復元口縁径は8.6cmを測る。



第11図 溝上部出土遺物 土師器



① Ⅲ層黒色土に白砂ブロック混じり
他の柱穴埋土はⅢ層黒色土

第12図 柱 穴

柱穴

特別教室棟横調査区（B区）IV層上面において15基の柱穴と多数の杭痕が検出された。柱穴は、10～25cmの径を持つ円形のもの、30cm以上の長径を持つ楕円形のものに分かれ、柱穴4と柱穴5及び柱穴9と柱穴10は切り合う形で検出された。深さは検出面より1～39cmとさまざまである。埋土は、Ⅲ層の黒色土であり、遺物は出土していない。なお、柱穴11～15に関しては範囲が調査区外に及び、また、遺構破壊の可能性がないものと判断して検出のみにとどめた。配列に関しても、調査区が限られていることから、明確な形は得られず、杭痕の配列等の性格も含めて判断は避けることとした。

第2表 柱穴一覧表

番号	径cm	深さcm	番号	径cm	深さcm	番号	径cm	深さcm	番号	径cm	深さcm
1	16×20	8	2	17×18	4	3	25×23	3	4	18×19	4
5	約36×24	18	6	11×10	1	7	14×25	12	8	18×33	16
9	約25×21	39	10	24×23	11	11	20×20		12～25は検出のみ		

2 遺物

蓋形土器（第13図32～34）

口縁径が19～23cmのもので、口縁径の長さに比べ高さが低い。口縁部は大きく外反し、内側に明瞭な稜が施されているものもある。裾部は長い。外面は32がハケ目調整、33がハケ目及びナデ調整、34はナデ調整が、内面はともにナデ調整が施されている。

甕形土器（第13・14・15・16・17図、35～90）

口縁部はくの字状に外反し、胴部はやや膨らむものとそれほど張らずになだらかに底部へ続いていくものがある。また、頸部あるいは胴部上位に突帯を有しないもの、突帯を有するものにもわかる。脚台は高さも低いものから大きく裾が広がるものまでである。器面はあれているものが多いが、ハケ目、ヘラ削り、ナデ調整が内外面に見られる。胎土には、石英、長石、角閃石を多量に含み、焼成も良好なものがほとんどである。本遺跡の主体をなすものである。

35は頸部からなだらかに底部へつながる脚台をもたない甕形土器である。内外面ともにヘラ削りによる調整が施されている。復元口縁径18.5cm、器高が23cmである。溝上部に近いところで出土した。36は口縁部が立ち上がり気味に外反する。37・38は胴部の張りがほとんどなく、頸部から直行気味に下りる。復元口縁径がそれぞれ32cm、38cmある大型の甕である。39～41は復元口縁径が28cm前後、42～47は24cm前後、48～61は20cm前後の甕形土器である。48と56は溝上部に近いところで出土した。40は胴部が丸味を帯び外見上は球状に近い形を呈する。42・44・47は内面の稜が明確である。43・55の口縁部は立ち上がり気味に外反する。46は、頸部にハケ目調整具で段を作っており、胴部最大径が口縁径より大きい。48は胴部最大径が胴部のやや上位にあり、内面の稜も明確である。49はほかのものと比較してやや大きめに外反し、外面には縦方向と斜め方向の、内面には横方向のハケ目調整が施される。50は口縁部がわずかに先端部のみ外反するだけである。51は、胴部最大径が口縁径より大きく胴部の中程にある。52・

53は頸部に弱い段を有している。56は、口縁部から頸部にかけて縦方向のハケ目調整の後ナデ調整を行っている。内面にススが付着している。57・58は外面をハケ目による調整を行っている。58はハケ目調整具で段を有している。61も、46や58と同様に段を有し、また、内面の稜も極めて明確である。62～75は頸部や胴部上位に突帯を有するものである。62は頸部はしまり、くの字状に外反する口縁部をもち、胴部は丸味を呈している。頸部に刻み目突帯を廻らし、頸部内側には稜線が見られる。口縁径25cmである。63は太い1条の突帯に刻み目を廻らす。口縁部ははやや立ち上がり気味であり、31.5cmの口縁径をもつ。64も太い1条の刻み目突帯であるが、上部に反り返り気味に貼付けしてあるのが特徴である。65は直立気味に外反し、頸部に突帯を付する。口縁端部が平坦面をもつ。66・67は断面三角形の刻み目突帯を有し、頸部が締まり、くの字状に外反するものである。68～75は突帯の断面が三角形のものと台形のもの、刻み目を有するものと有さないものとにわかれる。全体的に摩耗を受けているが、外面にはナデやハケ目調整が、内面にはナデ調整が施されている。76は胴部から底部にかけての甕型土器である。外面にススが付着している。77～90は中空の脚台を有する甕型土器である。脚部が高いものから低いものまでさまざまである。77・81は脚部が高い方でラッパ状に広がっている。79は脚部がスラリと外反気味に広がっている。80は端部が肥厚している。83・85は器壁が薄い甕型土器の脚部である。83・84は胴部と脚部の接合部分を丁寧に調整し、平坦にしてある。89は脚台が低い小型の甕型土器である。外面はほとんどがハケ目やナデ調整であるが、78, 82, 90はヘラ削りによる調整が認められる。内面はナデ調整がほとんどである。全体的に見ると低～中位の脚台を有するものが多いといえる。

鉢形土器 (第17図91, 92)

若干上げ底の脚台を有する鉢形土器である。91は胴部との接合部に指頭圧痕を残している。92も胴部との接合部を強く押した痕跡が見られる。

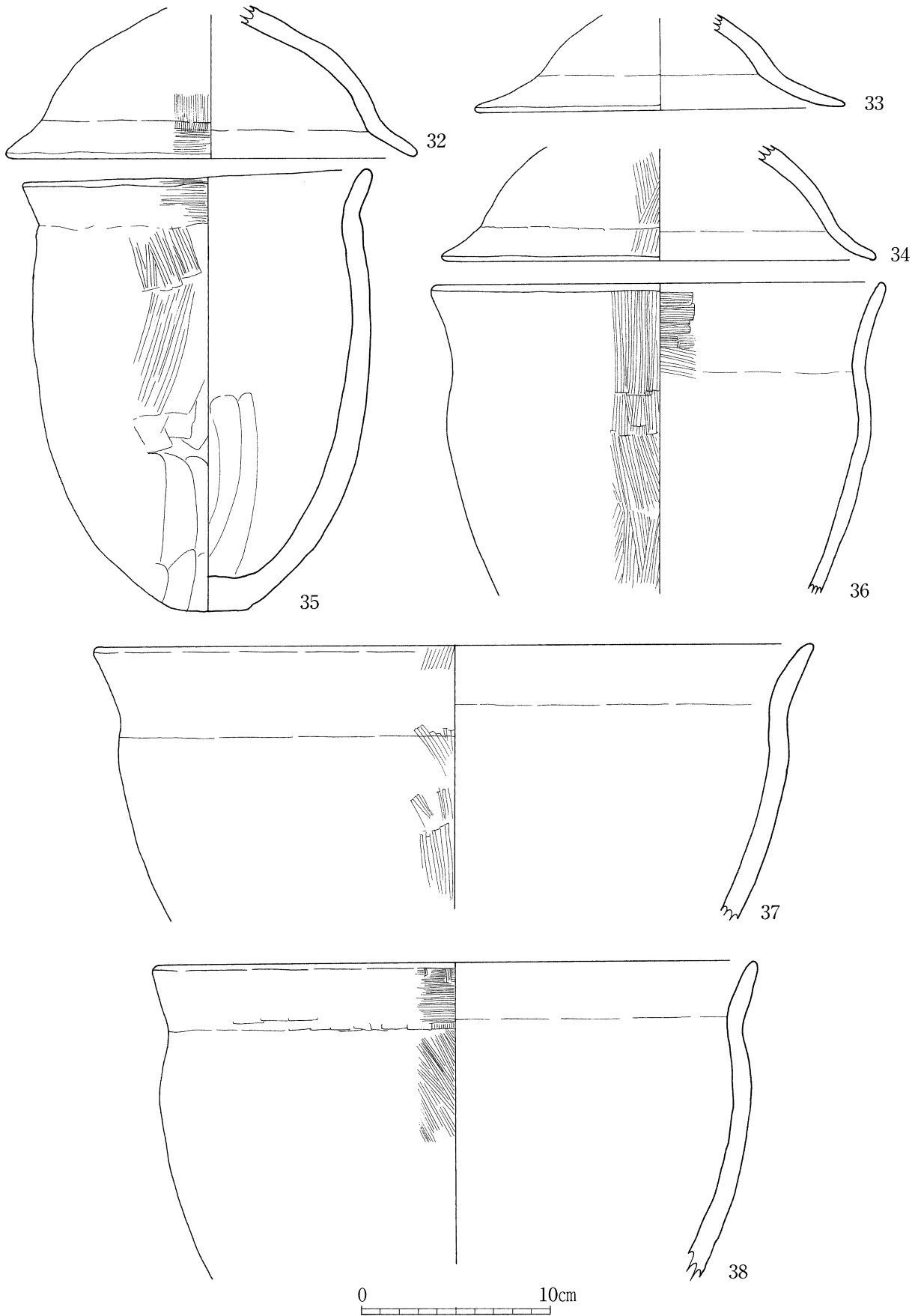
埴形土器 (第18図93)

93は口縁部をわずかに残す埴形土器である。復元口縁径が約13cmを測る。

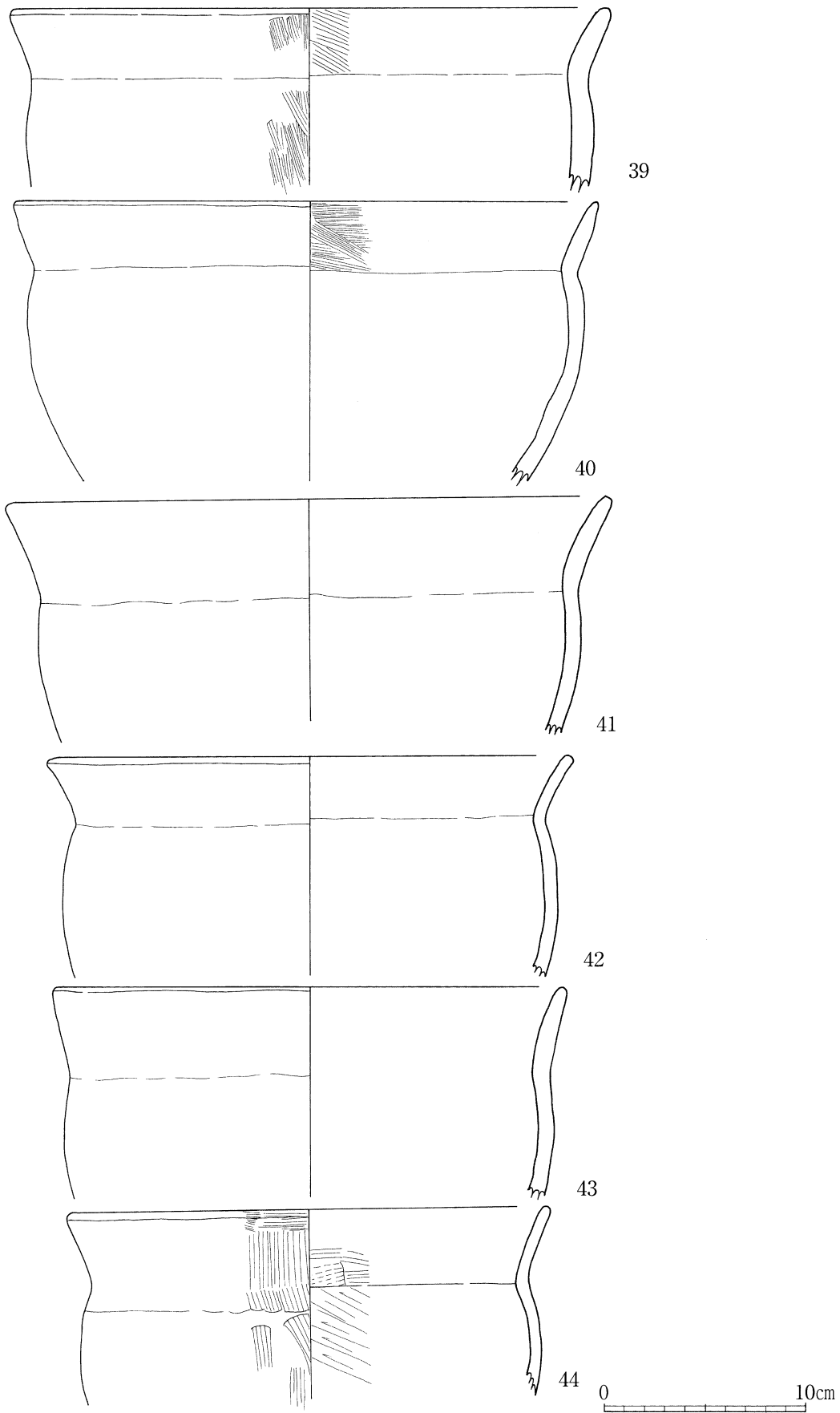
壺形土器 (第18・19・20図94～128)

本遺跡の主体をなす。胴部や頸部に突帯を有するものが多く、底部は平底のものが割合多い。胎土は石英、長石、角閃石を多量に含み、焼成も全体的に良好である。

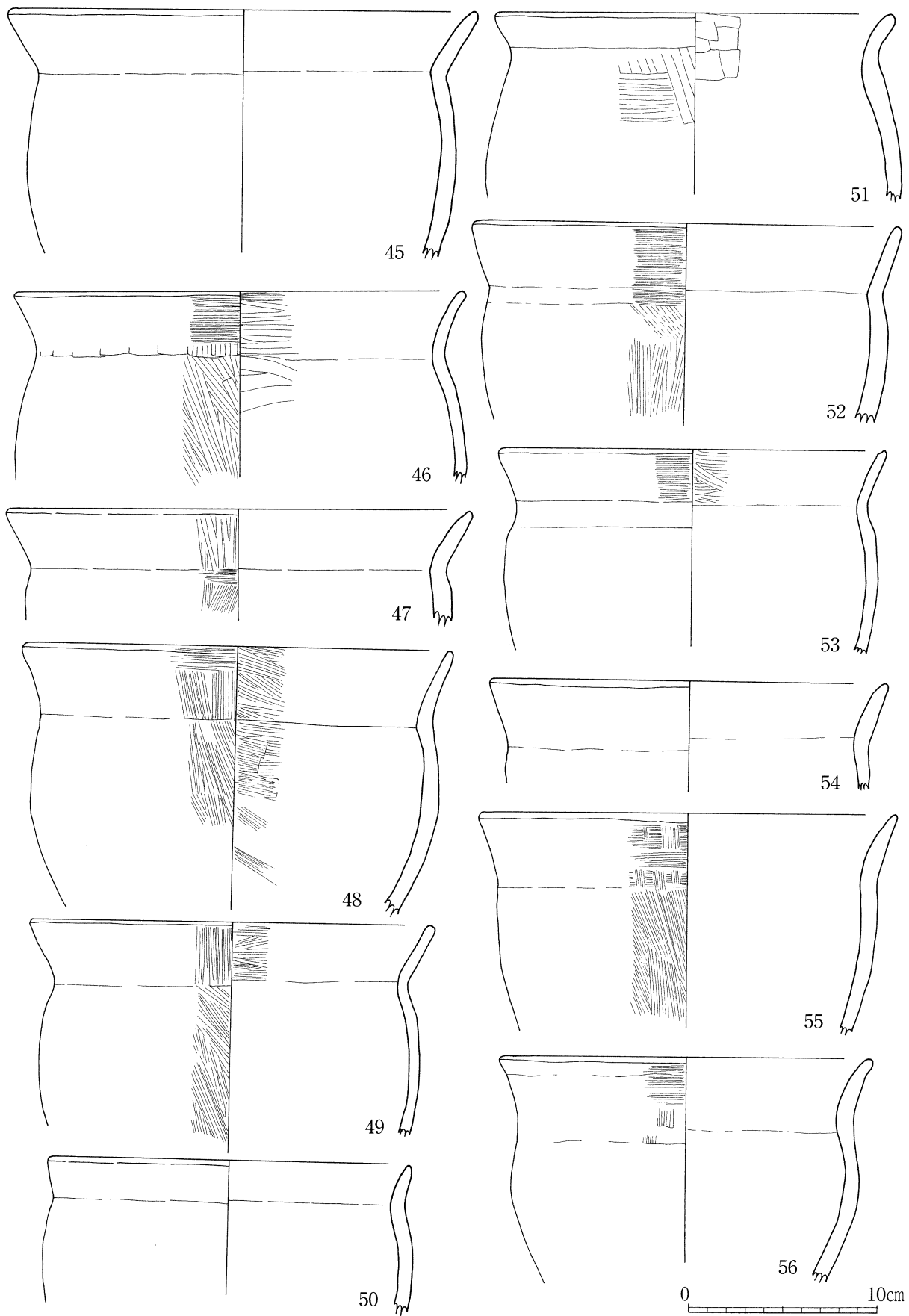
94は小型の壺である。口縁部は大きく外反し頸部がしまる。最大径が口縁部にある。約6cmである。95は完形の状態出土した壺形土器である。胴部に断面が三角形の1条の突帯に細めの刻みを入れてあり、底部は尖底気味の丸底である。口縁はわずかに外反している。口縁径11cm、器高が23cmを測る。96は頸部が割合締まり、胴部に断面が台形の1条の刻み目突帯を有している。復元口縁径は12cmである。97～99は口縁部がラッパ状に外反する壺形土器である。97は口縁径13cmを測る。頸部内面には接合の後がはっきりと残っており、また胴部内面には指頭による調整の後も残る。外面はハケ目やナデによる調整が施されている。99～101は頸部に突帯を有するものである。99は断面三角形の貼り付け突帯を有する。口縁部が長く、口縁径が21cm程ある大型のものと思われる。溝上部に近いところで出土した。100は口縁部内面に若干の段がついている。101は接合面から見て、直立気味に頸部へと移行するものと思われる。



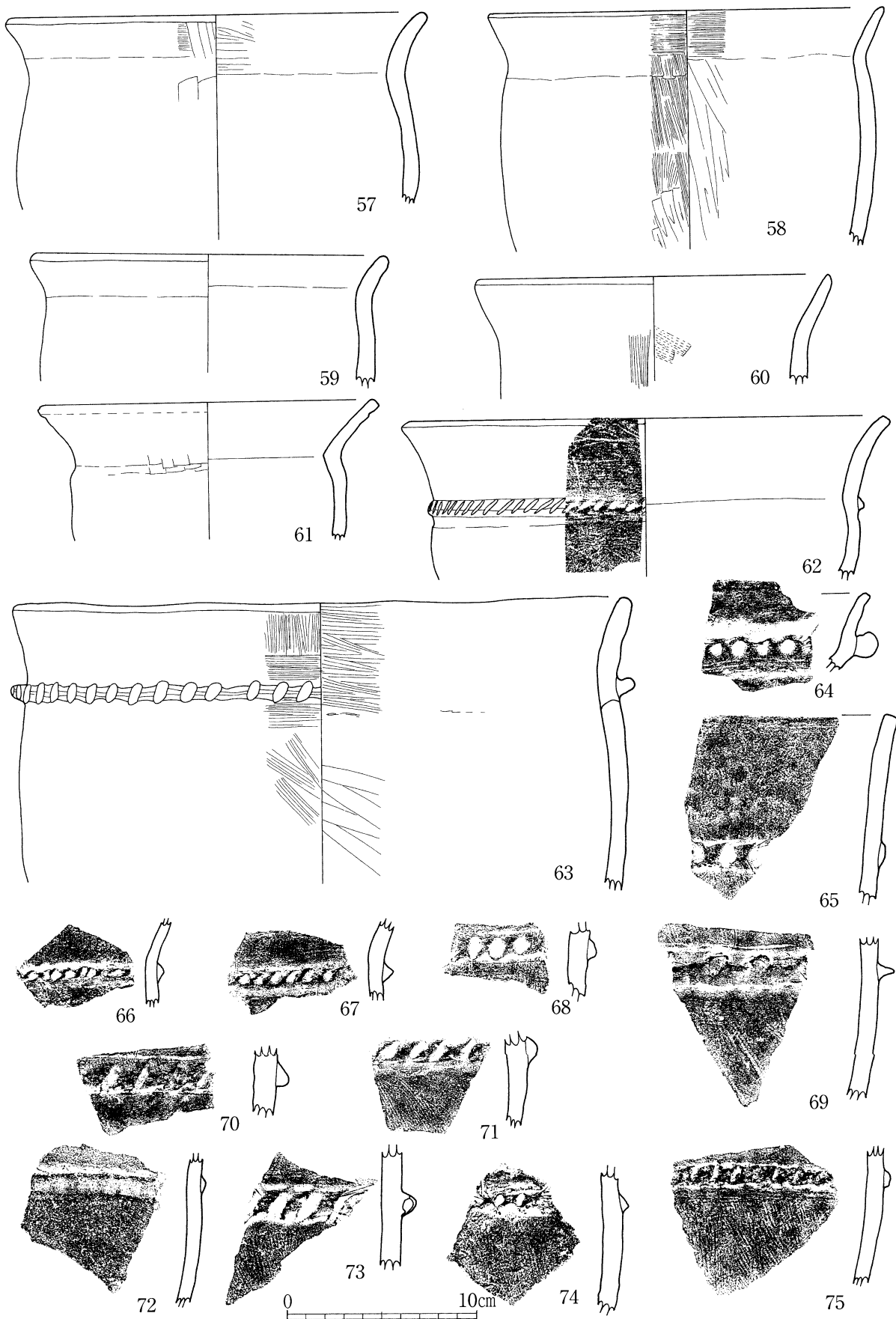
第13図 出土遺物(1)蓋, 甕



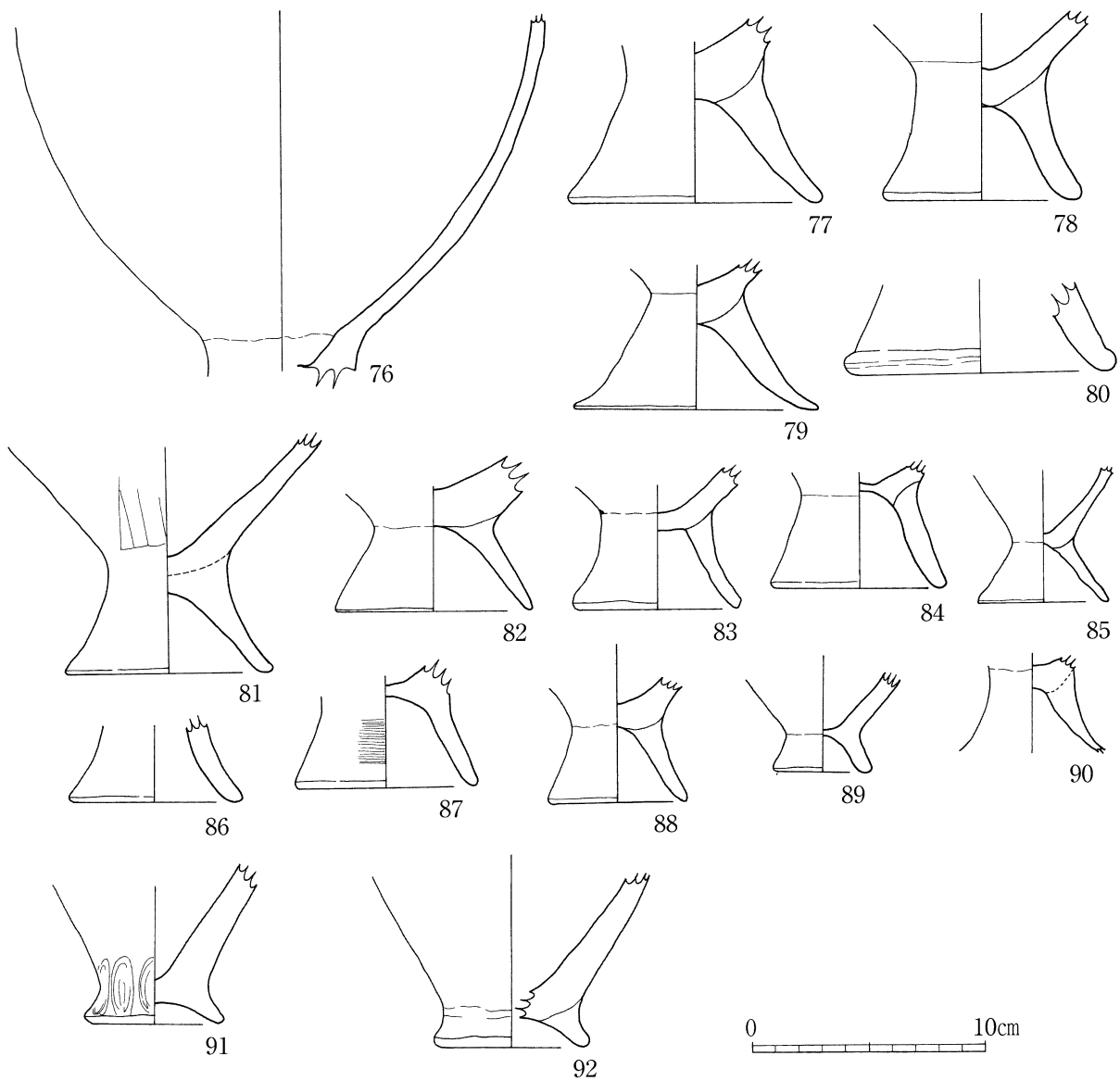
第14図 出土遺物(2)甕



第15図 出土遺物（3）甕

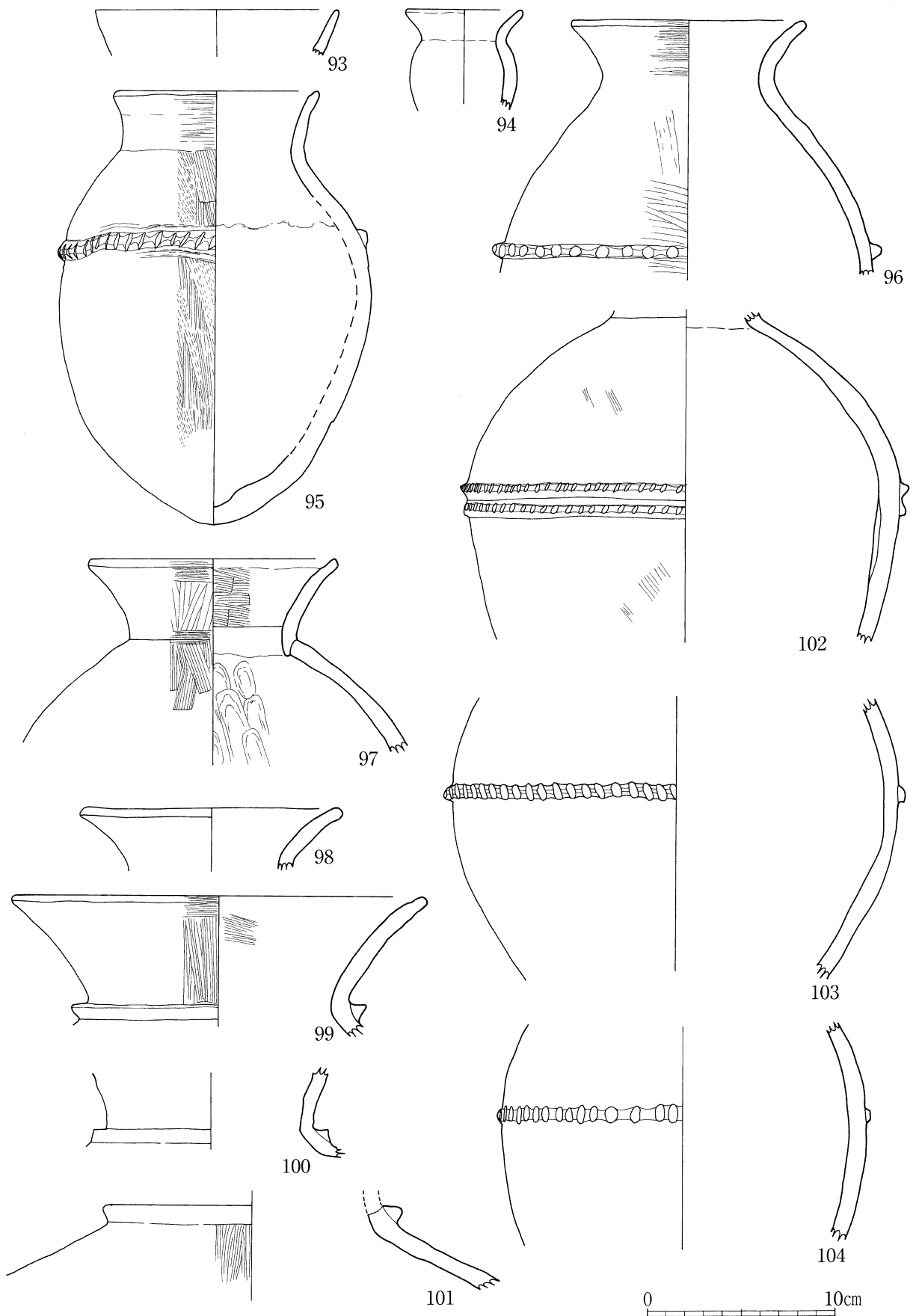


第16図 出土遺物(4)甕

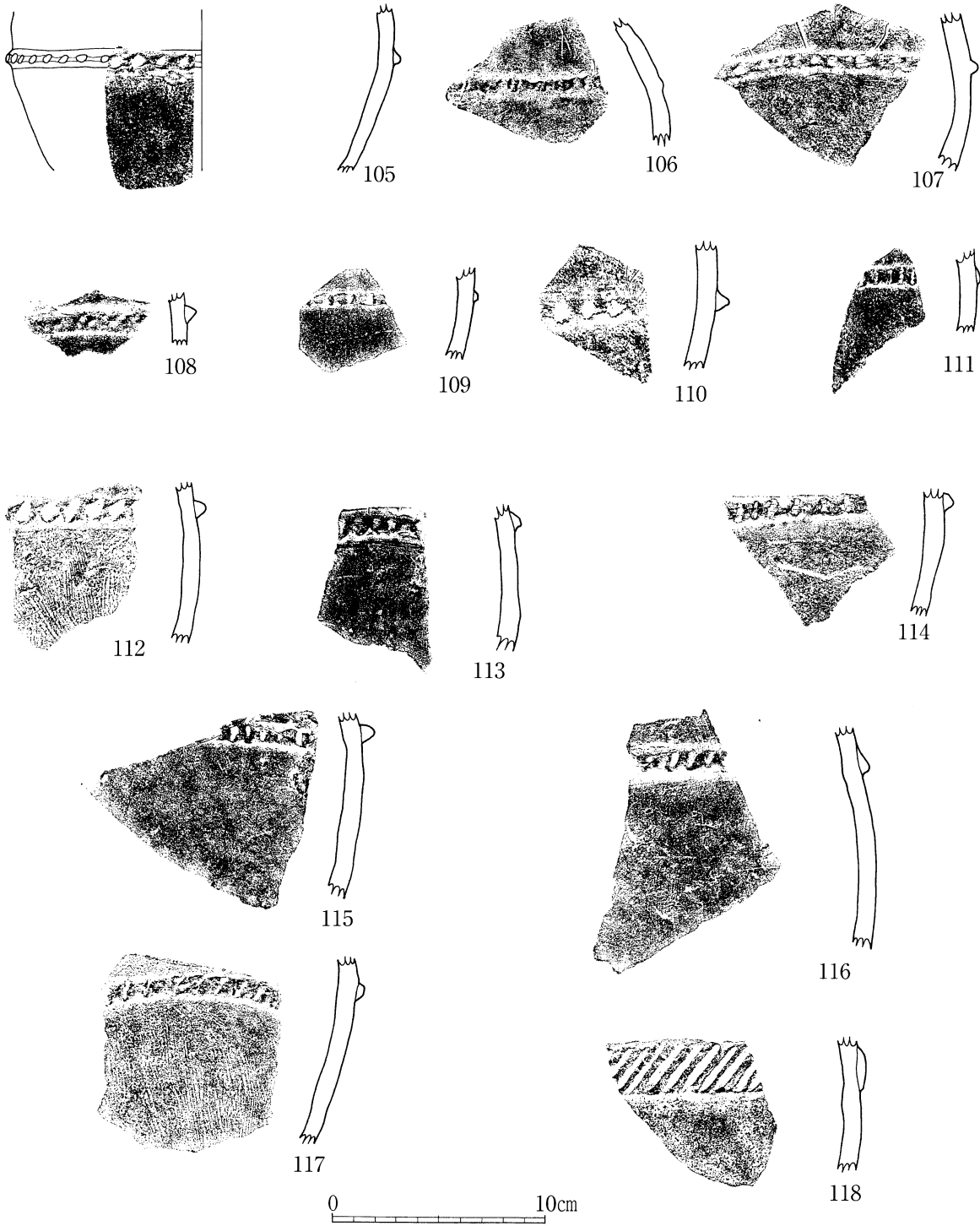


第17図 出土遺物（5）甕，鉢

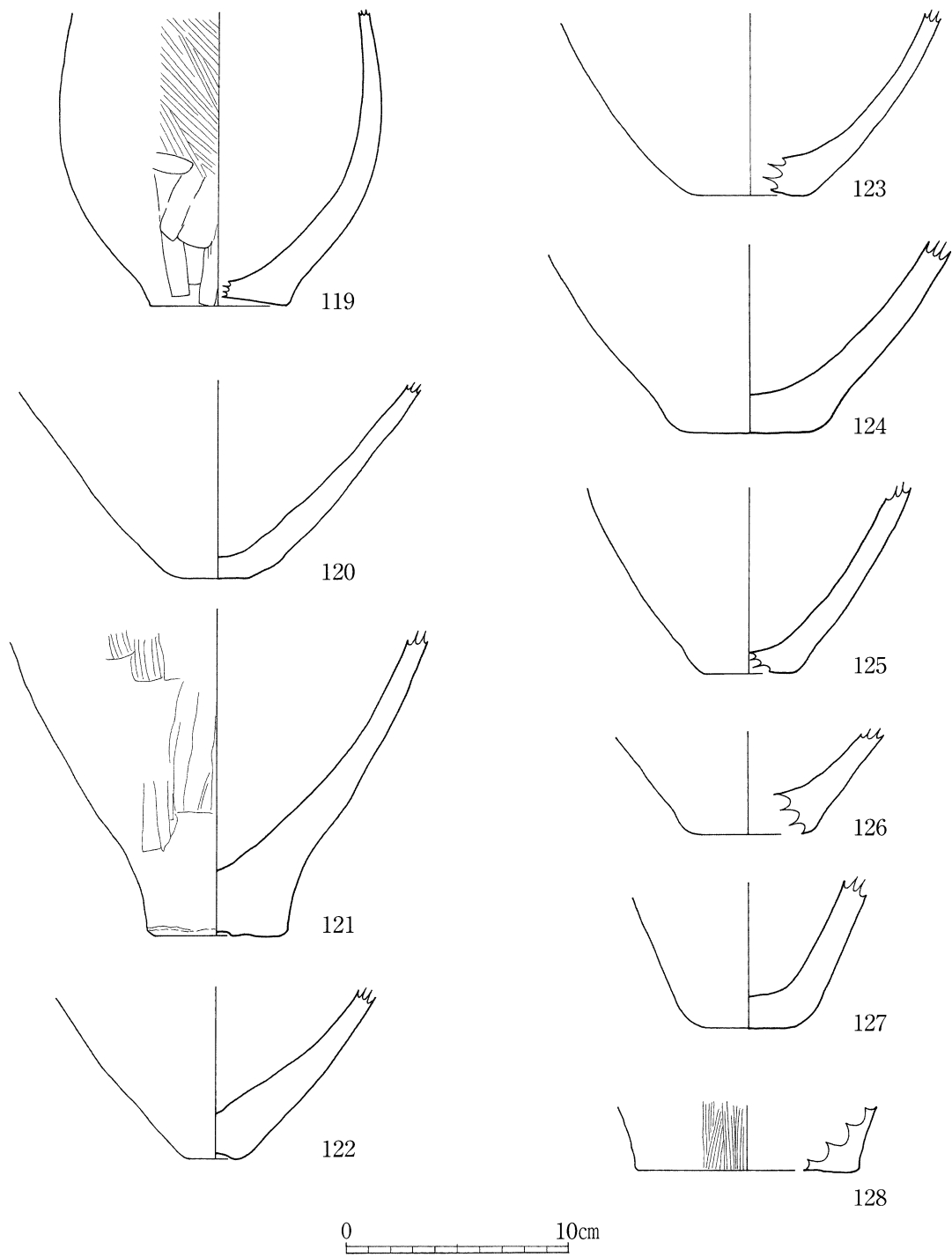
102は2条の刻み目突帯を有するもので、胴部は球形に近い。器面は胴部の突帯周辺を横方向に、その他の部分は縦方向にナデ調整を行っている。103～118は1条の刻み目突帯を有する壺形土器である。105・108・110・116は断面が三角形，109・113・117は断面が台形，118は幅広の刻み目突帯を有している。105や116は浅い刻み目を，109は太めの刻み目を入れてあるなどさまざまである。119～128は壺形土器の底部である。平底気味の底部が多い中で，119・122は若干上げ底の底部をもち，121・124・128は安定している平底をもつ。外面は全体的にハケ目やヘラ削りによる調整が認められる。119の外面にはススも付着している。



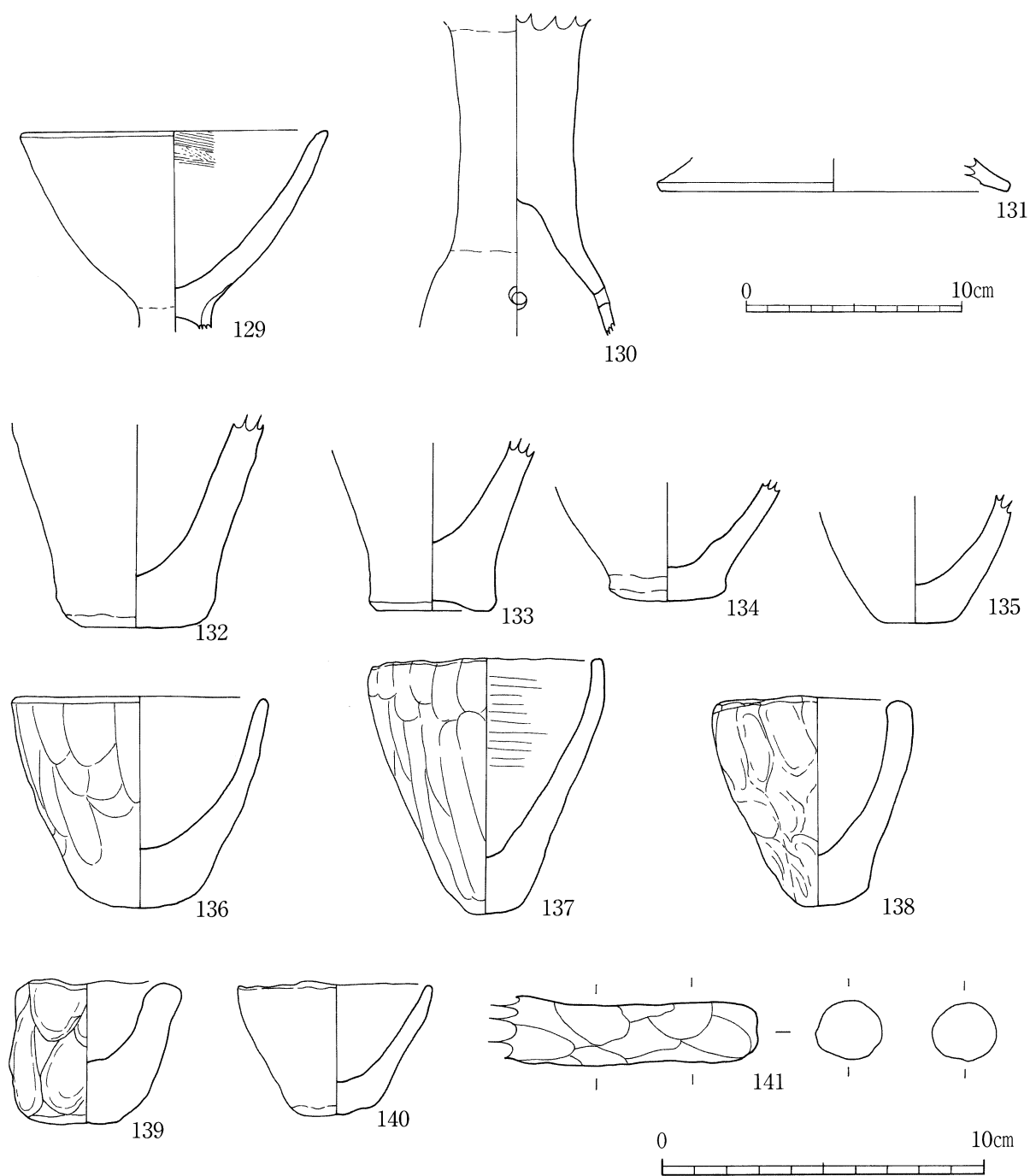
第18图 出土遺物(6) 罎, 壺



第19図 出土遺物(7)壺



第20図 出土遺物（8）壺



第21図 出土遺物（9）脚付碗，高坏，小型壺，手づくね土器，ひしゃく形土製品

碗形土器（第21図129）

129は脚台を有する碗形土器である。外面はハケ目による調整がなされ、口縁部はやや外反気味である。脚台の形状や高さは欠落しているため不明。

高坏形土器（第21図130・131）

130は高坏の脚部で、外面はヘラ磨きによる調整がなされている。筒形の柱脚で裾部が屈曲

した後内湾している。また裾部には、円形の透孔が穿たれている。透孔は1か所認められるが、4か所あったものと思われる。131も高坏の脚部である。残存部分はわずかであるが、底部径が16cm以上ある大形の高坏で、裾部がゆるやかに外開きする形状であることがわかる。

小型壺形土器（第21図132～135）

小型の壺形土器である。底部は肥厚した平底（132・134・135）と若干上げ底のもの（133）とに分かれる。全体的に摩耗が著しい。

手づくね土器（第21図136～140）

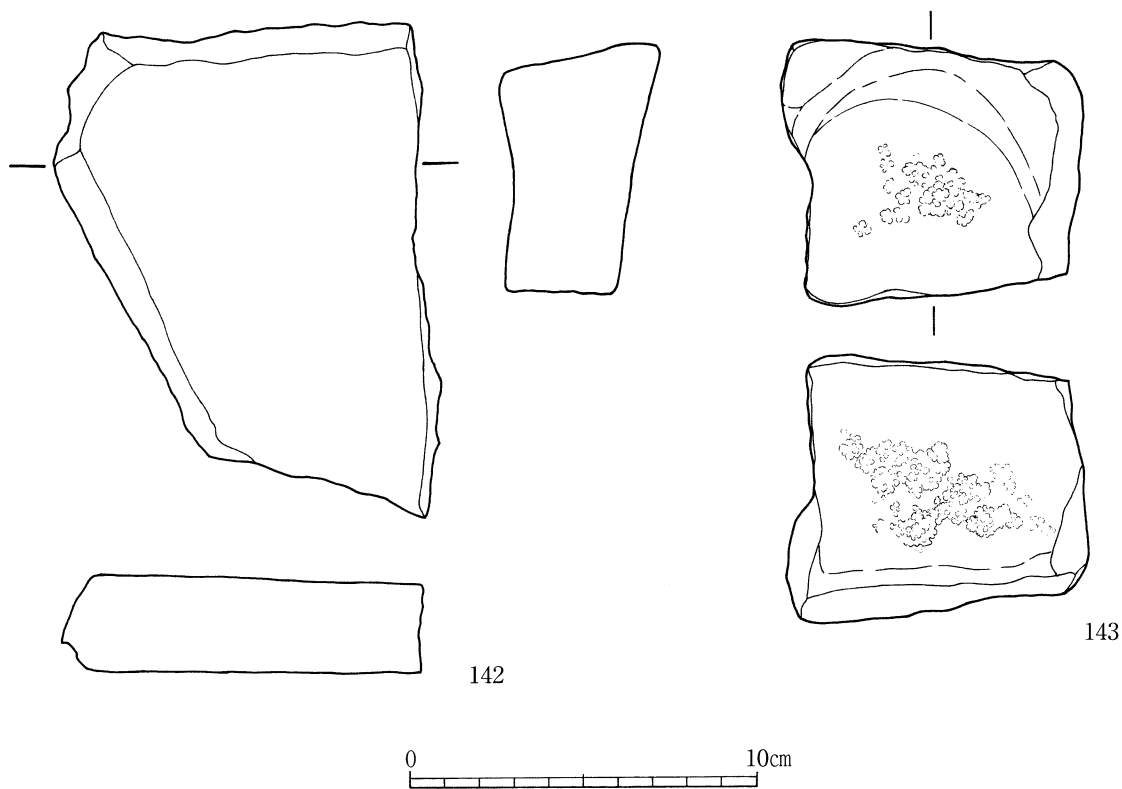
指頭の調整痕を器面全体にもつ土器でミニチュア土器である。140も摩耗により調整痕が消滅しているがこの類に入る。鉢形土器を模したものと思われる。左右対象にならないものや口唇部も平坦ではなく凸凹であるのも特徴である。口縁径は5～8cm、器高は4～8cm程度である。

ひしゃく型土製品（第21図141）

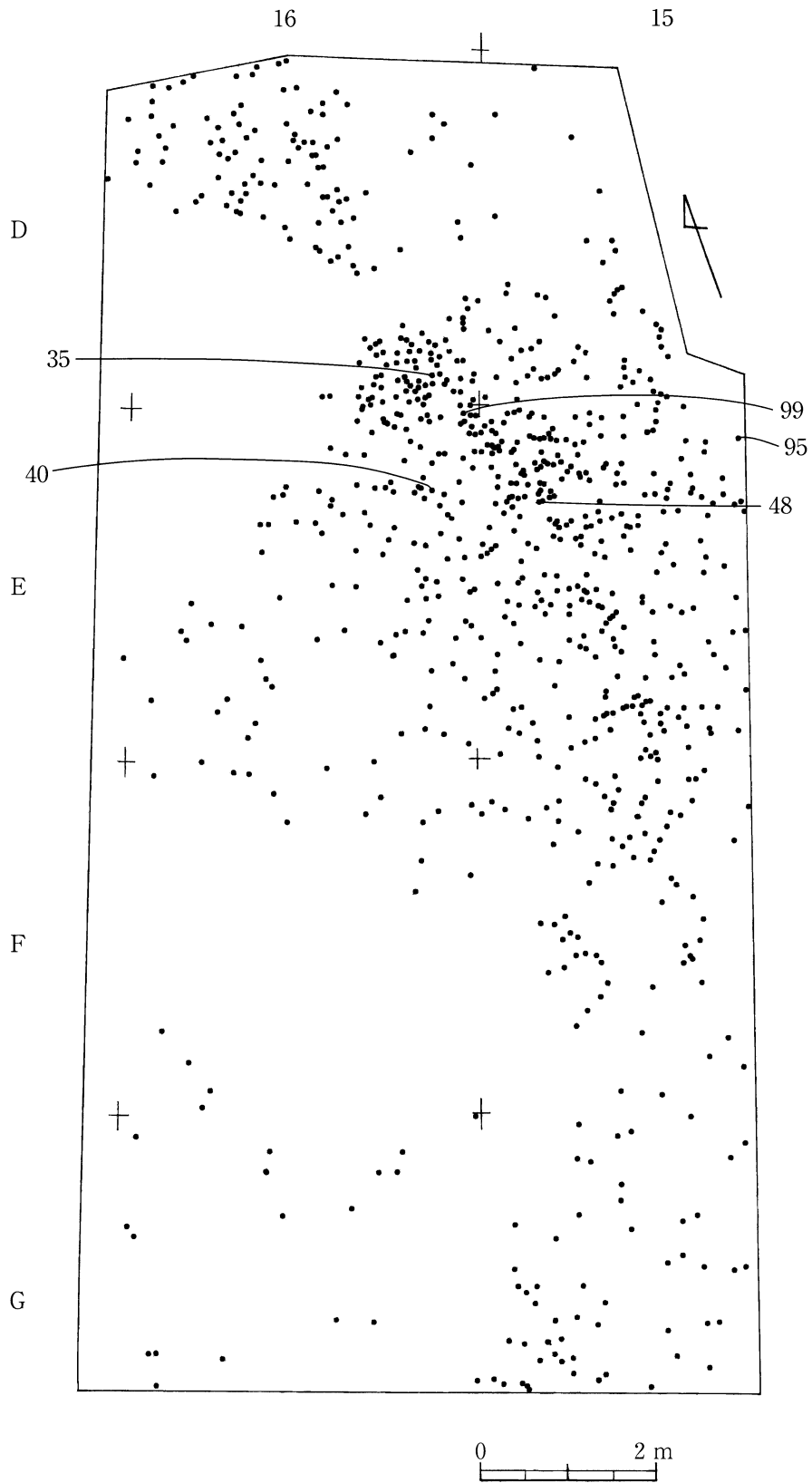
成川式土器に伴って時々出土するひしゃく型土製品の柄の部分と思われる。柄部は8cmほど残っており、径も2cmほどある。胎土・焼成共に他の土器と変わるものではなく、本遺跡の主体をなす成川式土器と同時期のものと考えてもよいであろう。

石器（第22図142～143）

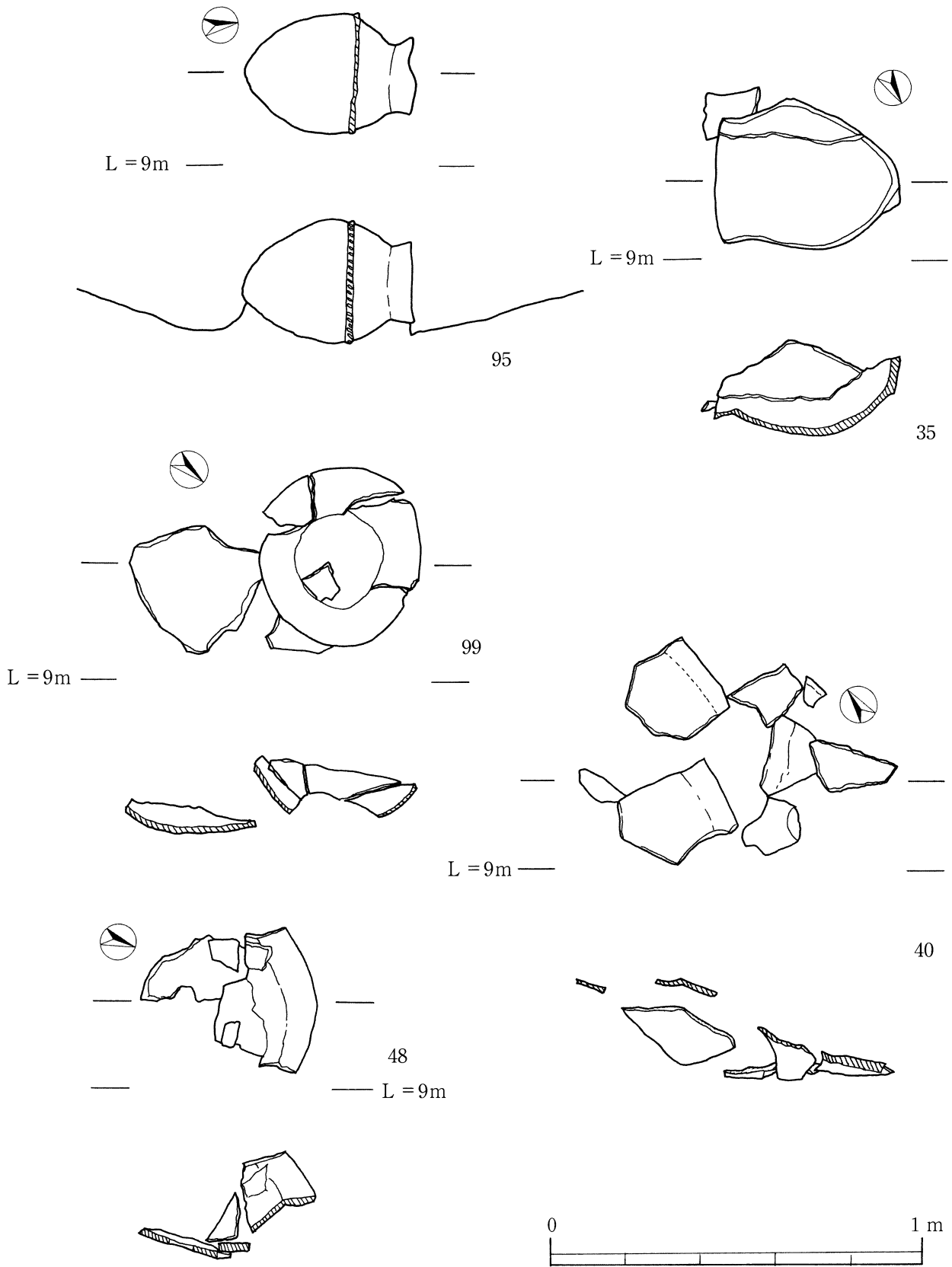
本遺跡から出土した石皿である。2点とも分割あるいは破損した状態で出土した。作業面は両面全体に見られるものである。142は表面は平らでくぼみがない。143は凹部をもち、敲打痕が両面に見られる。



第22図 出土遺物（10）石器



第23図 古墳時代遺物分布状況



第24図 古墳時代遺物出土状況

第3表 土器観察表

< 1～5は弥生式土器, 6～30は溝内出土遺物, 31は溝上部出土遺物 >

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	外 面 調 整	内 面 調 整	胎 土	焼成	色調	備 考
7	1	F-15	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	淡茶褐	肩部に3条の沈線文
	2	E-15	〃	ヘラ磨き	〃	〃 〃 〃	〃	黒茶褐	三角突帯
	3	E-16	〃	〃	ヘラ削り	〃 〃 〃	〃	茶褐	〃
	4	E-15	〃	〃	ナデ	〃 〃 〃	〃	黒茶褐	〃
	5	E-15	〃	〃		〃 〃 〃	〃	茶褐	充実脚台
9	6	溝内出土遺物	Ⅲ	ナデ	ナデ	〃 〃 〃	良好	淡茶褐	刻目突帯
	7		〃	ハケ目	ハケ目, ナデ	石英, 長石	〃	〃	スス付着
	8		〃	ナデ	ナデ	石英, 長石, 角閃石	〃	茶褐	
	9		〃	〃	ハケ目	石英, 長石	〃	〃	刻目突帯
	10		〃	〃	ハケ目, ナデ	石英, 長石, 角閃石	〃	淡茶褐	刻目突帯, スス付着
	11		〃	〃	ナデ	〃 〃 〃	〃	黒茶褐	刻目突帯
	12		〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	灰茶褐	〃
	13		〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	
	14		〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	15		〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	16		〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	17		〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	18		〃	〃	ヘラ削り, ナデ	ハケ目, ナデ	〃 〃 〃	〃	〃
10	19	溝内出土遺物	Ⅲ	ハケ目, ナデ	ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	淡茶褐	
	20		〃	ナデ	ナデ, ヘラ磨き	〃 〃 〃	〃	〃	
	21		〃	ハケ目	ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	
	22		〃	ハケ目, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	刻目突帯
	23		〃	ナデ	ハケ目, ナデ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	〃
	24		〃	〃	ナデ, ヘラ削り	〃 〃 〃	〃	〃	〃
	25		〃	〃	ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	〃
	26		〃	ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	
	27		〃	ハケ目	ナデ, ヘラ削り	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	
	28		〃	〃	ヘラ削り	〃 〃 〃	〃	〃	
	29		〃	ナデ	ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	
	30		〃	指頭圧痕	〃	〃 〃 〃	〃	〃	手づくね土器
11	31	溝上出土遺物	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	淡茶褐	土師器皿

挿図 番号	遺物 番号	出土区 層	外 面 調 整	内 面 調 整	胎 土	焼成	色 調	備 考
13	32	E-15 Ⅲ	ハケ目, ナデ	ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	淡茶褐	
	33	F-15 ♪	ナデ	♪	♪ ♪ ♪	♪	♪	
	34	E-15 ♪	ハケ目	♪	♪ ♪ ♪	♪	♪	
	35	D-16 ♪	ヘラ削り, ナデ	ヘラ削り, ナデ	♪ ♪ ♪	♪	茶褐	脚台無し甕
	36	D-15 ♪	ハケ目	ハケ目, ナデ	♪ ♪ ♪	♪	♪	
	37	D-15 ♪	ハケ目, ナデ	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	♪	
	38	D-15 ♪	♪ ♪	ナデ	♪ ♪ ♪	♪	♪	スス付着
14	39	D-15 Ⅲ	ハケ目	ハケ目, ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	暗茶褐	スス付着
	40	E-16 ♪	ナデ, ヘラ削り	ハケ目, ヘラ削り	♪ ♪ ♪	♪	♪	♪
	41	E-16 ♪	ハケ目, ナデ	ナデ	♪ ♪ ♪	♪	淡茶褐	
	42	E-15 ♪	♪ ♪	♪	♪ ♪ ♪	♪	茶褐	スス付着
	43	E-15 ♪	ナデ	♪	♪ ♪ ♪	♪	淡茶褐	♪
	44	E-15 ♪	ハケ目	ハケ目	♪ ♪ ♪	♪	茶褐	♪
15	45	E-16 Ⅲ	ナデ	ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	暗茶褐	スス付着
	46	E-15 ♪	ハケ目, ナデ	ハケ目, ナデ	♪ ♪ ♪	♪	黒茶褐	
	47	D-16 ♪	ハケ目	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	淡茶褐	
	48	E-15 ♪	♪	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	茶褐	スス付着
	49	E-15 ♪	♪	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	淡茶褐	
	50	D-16 ♪	ナデ	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	黒褐	スス付着
	51	E-15 ♪	ハケ目, ナデ	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	茶褐	
	52	E-16 ♪	♪ ♪	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	♪	スス付着
	53	E-15 ♪	ナデ	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	♪	♪
	54	E-15 ♪	♪	ナデ	♪ ♪ ♪	♪	淡茶褐	
	55	E-15 ♪	ハケ目	ハケ目, ナデ	♪ ♪ ♪	♪	♪	
56	E-15 ♪	ハケ目, ナデ	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	茶褐	内面にスス付着	
16	57	D-16 Ⅲ	ハケ目	ハケ目, ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	淡茶褐	
	58	E-15 ♪	♪	ナデ, ヘラ削り	♪ ♪ ♪	♪	黒茶褐	スス付着
	59	D-16 ♪	ナデ	ナデ	♪ ♪ ♪	♪	茶褐	♪
	60	E-15 ♪	ハケ目, ナデ	ハケ目, ナデ	♪ ♪ ♪	♪	♪	
	61	E-16 ♪	♪ ♪	ナデ	♪ ♪ ♪	♪	♪	
	62	E-16 ♪	♪ ♪	♪	♪ ♪ ♪	♪	暗茶褐	刻目突帯
	63	E-15 ♪	♪ ♪	ハケ目, ナデ	♪ ♪ ♪	♪	淡茶褐	♪
	64	E-15 ♪	ナデ	ナデ	♪ ♪ ♪	♪	♪	♪
	65	E-15 ♪	ハケ目, ナデ	♪	♪ ♪ ♪	♪	茶褐	♪
	66	E-15 ♪	♪ ♪	ハケ目	♪ ♪ ♪	♪	淡茶褐	♪
	67	D-16 ♪	♪ ♪	ナデ	♪ ♪ ♪	♪	暗茶褐	♪

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	外 面 調 整	内 面 調 整	胎 土	焼成	色調	備 考
16	68	E-15	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	黒褐	刻目突帯
	69	D-15	〃	ハケ目, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	〃
	70	D-16	〃	ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃
	71	F-15	〃	ハケ目	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	〃
	72	E-16	〃	ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	黒褐	〃
	73	E-15	〃	ハケ目, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃
	74	E-15	〃	〃 〃	〃	〃 〃 〃	〃	黒茶褐	〃
	75	D-16	〃	ハケ目	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	〃
17	76	E-15	Ⅲ	ハケ目	ハケ目	石英, 長石, 角閃石	良好	茶褐	スス付着
	77	E-15	〃	ヘラ削り	ナデ	〃 〃 〃	〃	赤茶褐	
	78	E-15	〃	ヘラ削り, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	
	79	D-16	〃	ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	
	80	E-15	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	
	81	D-16	〃	ハケ目, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	82	E-16	〃	ヘラ削り, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	83	E-15	〃	ハケ目, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	黒茶褐	
	84	E-15	〃	〃 〃	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	
	85	D-16	〃	ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	86	E-15	〃	〃	ハケ目, ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	
	87	E-15	〃	ハケ目, ナデ	ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	
	88	E-15	〃	〃 〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	89	E-16	〃	ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
90	E-15	〃	ヘラ削り, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	〃		
91	G-16	〃	ナデ, 指頭圧痕	〃	〃 〃 〃	〃	暗茶褐	鉢	
92	E-16	〃	〃 〃	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	鉢	
18	93	F-15	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	淡茶褐	埴
	94	E-15	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	小形壺
	95	E-15	〃	ヘラ削り, ハケ目	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	完形, 刻目突帯
	96	D-16	〃	ハケ目, ナデ	ヘラ削り, ハケ目	〃 〃 〃	〃	〃	刻目突帯
	97	D-16	〃	〃 〃	ハケ目, 指頭圧痕	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	
	98	E-15	〃	ナデ	ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	
	99	E-16	〃	ハケ目, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	〃	頸部に三角突帯
	100	E-15	〃	ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	〃
	101	E-16	〃	ハケ目	〃	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	〃
	102	D-16	〃	ハケ目, ナデ	ナデ, ヘラ削り	〃 〃 〃	〃	茶褐	2条の刻目突帯
	103	D-16	〃	ナデ	ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	刻目突帯
	104	F-15	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	灰茶褐	〃

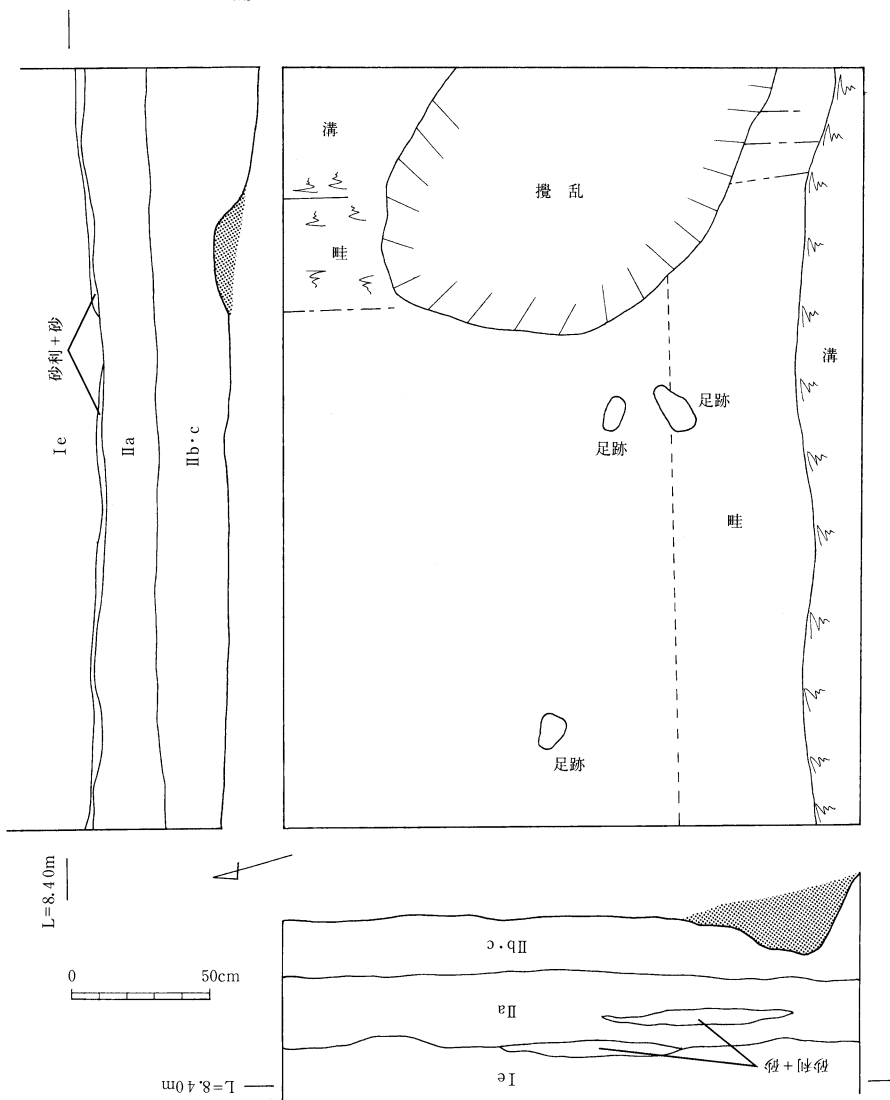
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	外 面 調 整	内 面 調 整	胎 土	焼成	色 調	備 考
19	105	E-15	Ⅲ	ナデ	ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	茶褐	刻目突帯
	106	E-15	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	〃
	107	E-15	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	〃
	108	D-16	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃
	109	F-15	〃	〃	ナデ, ヘラ削り	〃 〃 〃	〃	黒褐	〃
	110	E-16	〃	〃	ナデ	〃 〃 〃	〃	茶褐	〃
	111	F-15	〃	ハケ目, ナデ	〃	〃 〃 〃	〃	黒茶褐	〃
	112	D-16	〃	〃 〃	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	〃
	113	D-16	〃	ハケ目	ハケ目, ナデ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	〃
	114	D-16	〃	ナデ	ナデ	〃 〃 〃	〃	茶褐	〃
	115	D-16	〃	ヘラ削り, ナデ	ヘラ削り, ナデ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	〃
	116	D-16	〃	ハケ目, ナデ	ハケ目, ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	〃
	117	D-16	〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃 〃	〃	茶褐	〃
	118	E-16	〃	ナデ		〃 〃 〃	〃	〃	〃(やや幅広突帯)
20	119	E-15	Ⅲ	ハケ目, ヘラ削り	ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	茶褐	
	120	E-15	〃	〃 〃	ヘラ削り	〃 〃 〃	〃	〃	
	121	D-16	〃	〃 〃	ヘラ削り, ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	
	122	E-16	〃	ナデ, ヘラ削り	ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	
	123	E-15	〃	〃 〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	124	E-15	〃	ヘラ削り	ヘラ削り, ナデ	〃 〃 〃	〃	灰茶褐	
	125	E-15	〃	〃	ヘラ削り	〃 〃 〃	〃	茶褐	
	126	G-15	〃	ハケ目	ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	
	127	E-16	〃			〃 〃 〃	〃		
	128	E-15	〃			〃 〃 〃	〃		
21	129	E-15	Ⅲ	ナデ	ハケ目, ナデ	石英, 長石, 角閃石	良好	淡茶褐	
	130	E-16	〃	ヘラ磨き		〃 〃 〃	〃	茶褐	
	131	E-15	〃			〃 〃 〃	〃		
	132	E-16	〃	ヘラ削り	ナデ	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	
	133	D-16	〃	指頭圧痕	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	134	E-15	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	
	135	E-15	〃	〃	〃	石英, 長石	〃	暗茶褐	
	136	F-15	〃	〃	〃	石英, 長石, 角閃石	〃	黒褐	手づくね土器
	137	D-16	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃
	138	E-15	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	淡茶褐	〃
	139	E-15	〃	〃		〃 〃 〃	〃	〃	〃
	140	E-15	〃	〃	ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	〃
	141	E-16	〃	指頭調整		〃 〃 〃	〃	茶褐	ひしゃく形土器

第4節 古代の調査

1 遺構

水田遺構

1年8組教室南側調査区（C区）では、一部が攪乱によって壊されていたものの、Ⅱc・シルト層に覆われる形で、水田とともに幅が約50cm前後の畦が南北へ約2m、東西に約2m検出された。また、畦の横には、対になる形で深さが25cm以上ある溝も検出され、南北方向へ走る畦・溝と東西方向へ走る畦・溝が直行している形になっている。水田面が古墳時代と中世の包含層に挟まれていることから、古代のものとも推測される。また、水田遺構上のシルト層を丁寧に剥がしていくと、足跡ではないかと思われるくぼみが3か所検出された。長さが、14～21cm、幅が8～10cmのものである。畦と溝の形状や方向から条里制のもとの水田遺構ではないかと推測されるが、2m×3mのトレンチ内での検出だけに足跡と思われるくぼみも含めて、今後慎重かつ多面的な検証が必要である。なお、古代に関する遺物は出土しなかった。



第25図 水田遺構

第V章 ま と め

県立国分高等学校の浄化槽設置に伴い実施した発掘調査の結果として、次のようなことがあげられる。

弥生時代

Ⅲ層から出土した多量の成川式土器に混じって、弥生時代前期～中期の土器が数点ではあるが出土していた。数が少ないことから、本調査区内においては、集落のあった可能性は低いと考えられるが、第2次調査（平成5年度）で検出された住居址との関連があるものと思われる。

古墳時代

A区から、古墳時代の遺物（主に成川式土器）が多量に出土した。出土遺物には、完形品の壺や大形の壺・甕の破片、蓋・椀・高坏形土器、手づくね土器などが含まれており、人々の生活の跡を感じることができる。おなじA区で検出された2条の遺構に関しては、下部に硬化面がないことや、溝の幅が一定でないことから自然流路と判断した。また、切り合いをもっていることから、同時期でないこともわかる。それぞれの埋土内の遺物に関しても、ローリングを受けてはいるが壺・甕・高坏形土器等多数の遺物が出土している。これらのことから判断して、付近に集落があったことも推測される。本遺跡に近い、城山山頂遺跡や妻山元遺跡等の集落との関連についての調査も今後の課題にしていきたい。

古代

C区から、断面が古墳時代と中世の包含層に挟まれる形で古代の水田遺構が検出された。また、水田遺構内に、足跡ではないかと思われるくぼみも3か所検出されている。さらに、水田と対になった畦と溝が直行するように各2条検出されており、調査範囲内の状況から方位が真北になると想定される。これらのことから考慮して、条里制のもとでの水田遺構ではないかと考えられる。文献や、国分市内に今も残る字名などから、本遺跡周辺には条里遺構が存在していたとされている。今回は、調査範囲が限定されていたことなどから、今後も検討が必要となってくるが、条里遺構に関する検証の一資料となればと考えている。

B区西側土層断面内で検出された柱穴（Ⅱa・耕作土で切られている）内炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、「永山修一氏『小右記』に見える大隅・薩摩からの進物記事の周辺」の中で記してある「平季基による大隅国府焼き討ち事件」と年代的に近いことがわかった。これは、長元2年（1029）に太宰府と国府との衝突が原因で起きた国府等の焼き討ち事件である。今のところ、大隅国府の所在位置は正確にわかっていないが、本遺跡付近に関連施設があったと考えられており、年代測定の結果により、柱穴が大隅国府等焼き討ち事件と関連を持つ遺構の可能性もあることも捨てきれず、今後検討の余地がでてきたことを付記しておきたい。

本御内遺跡第1次～第5次調査の総括

本御内遺跡の調査は、国分高校の体育館建替えに係る市道付替え部分の調査を平成4年度に、体育館建替えに係る調査を平成5年度に実施し、第1・2次調査となる。その後平成6年には、国分高校に理数科が新設されることとなり、その校舎新設に係る調査（第3次調査）が実施された。さらには、平成8年にプール及び弓道場建替えに係る調査（第4次調査）が実施され、平成11年、浄化槽新設に伴う今回の調査（第5次調査）が実施されたのである。足掛け8年、5次に及ぶ調査が行われ、さまざまな遺構・遺物が検出され重要な知見をもたらしてくれた。今後の本遺跡の発掘調査予定については不明であるので、ひとまずここで総括しておきたい。

まず土層についてであるが、本遺跡が立地するのが沖積層であるため、その調査地点ごとに土層の色調等、見かけが異なっており、地点ごとの対比が困難であった。最終的には5次調査B区の土層を基本とすることで対比可能となった。その特徴を以下にまとめる。

I層：国分高校及びその前身の国分高等女学校の頃に造成・整地された土層である。

II層：安山岩の風化土を母材とする土層で、小礫、砂、シルトに分層できる地点が多い。これは、平成5年の調査期間中に豪雨災害による背後の城山の土砂崩れで経験したような土石流災害の結果であると考えられる。小礫、砂、シルトの堆積が逆になっている箇所もあることから、複数回の土石流災害があったものと思われる。なお、シルト層の下部には鋤床層の形成が見られる箇所があり、水田として利用された時期があったようである。

III層：黒色土層である。上部のa層はグライ化して青灰色～灰色を呈し、その直下に水平な鋤床層が形成されていることや畦畔等も残っていることから水田遺構と判断される。黒色土のままである下部のb層からは成川式土器や弥生式土器がプライマリーな状態で出土する。

IV層：明黄褐色を呈する堅くしまった土層で、本遺跡のみならず、周辺遺跡の基盤層である。III層等から掘り込まれた溝の埋土にローリングを受けた縄文式土器が散見されるので、当該期の包含層となる可能性もあるが、本遺跡内では発見されていない。

これらの層序の時期や、時期ごとの概要は、次のようである。

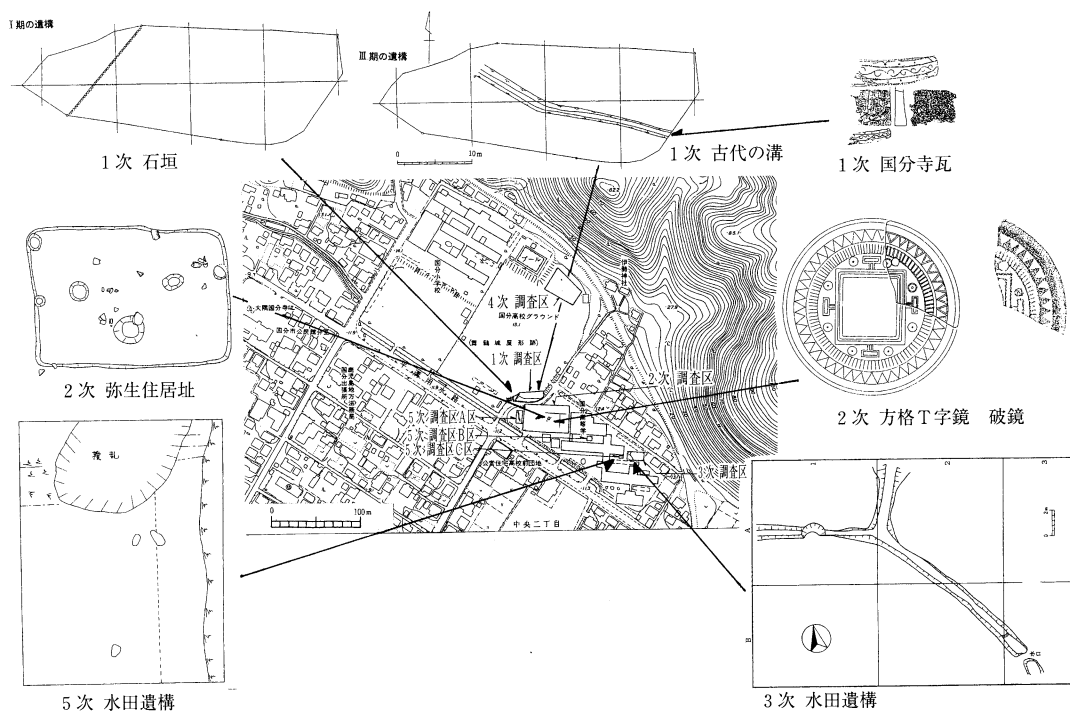
I層は、国分高等女学校や国分高校建設に伴う造成による近・現代の人為的な層である。

II層については、舞鶴城大手前の五間道路の石垣の根がこの層に掘り込まれていることからそれ以前の層であると判断できる。舞鶴城関連の遺構はこの石垣だけであり、「国分諸古記」に見られる「御犬垣跡、当分衆中屋敷」に該当するような、犬追馬場もしくは近世の侍屋敷関連の遺構は検出できていない。女学校関係の造成やII層中に見られる水田や畑としての土地利用に伴って消滅したものと推測できる。舞鶴城直前の時期の遺物として12世紀後半から16世紀前半の青磁や白磁が出土していることから、II層はこれらの本来の包含層である可能性が高い。ただし、その出土状態は決してプライマリーなものではないので、舞鶴城築城の際の削平・盛土の影響を考えざるを得ない。それを証するのが5次調査B区の土層断面で確認した柱穴である。II層中位の鋤床層の直下から検出され、埋土はII a層と全く異なるうえに炭化物が多く含まれ、火災にあったと推測できるものである。上部は鋤床層によって断ち切られ、柱穴の下半が土層中にはめ込まれたような状況である。上下の層に当該期と判断できる遺構がないので青磁・白磁の時期の遺構であろうと推測している。この遺構の全容が解明される機会を期待したい。

Ⅲ層は2時期に分けられる。2次、3次、5次調査で確認したグライ化した水田土壌であるⅢa層は、古代から中世にかけて作られた水田遺構であると思われる。この水田の畦畔は磁北ではなく、真北とそれに直交する方向であることが特徴であり、条里遺構であろうという推測が成り立つ。なお、3次調査の際水田遺構がⅣ層上面で検出されているが、そのⅣ層が「灰色粘土層。やや紫がかり、下部は黒色化している」という特徴によって1・2・5次調査でいうⅢ層と同一の層であると判断できることから、3次調査の水田も2次調査や5次調査の水田遺構と同一面であると思われる。しかし、畦畔方向が全く異なっており、この面の水田を条里遺構と判断するのに疑問を投げかけている。また、1次調査で断面V字形の溝が検出されており、この中から国分寺瓦が出土することや、真北に直交する方向に走ることから、この地点から西へ約300m離れた位置にある大隅国分寺跡との関連が考えられる。国分寺域や周囲の街区を考えるうえで一つの材料を提供するものと思われる。

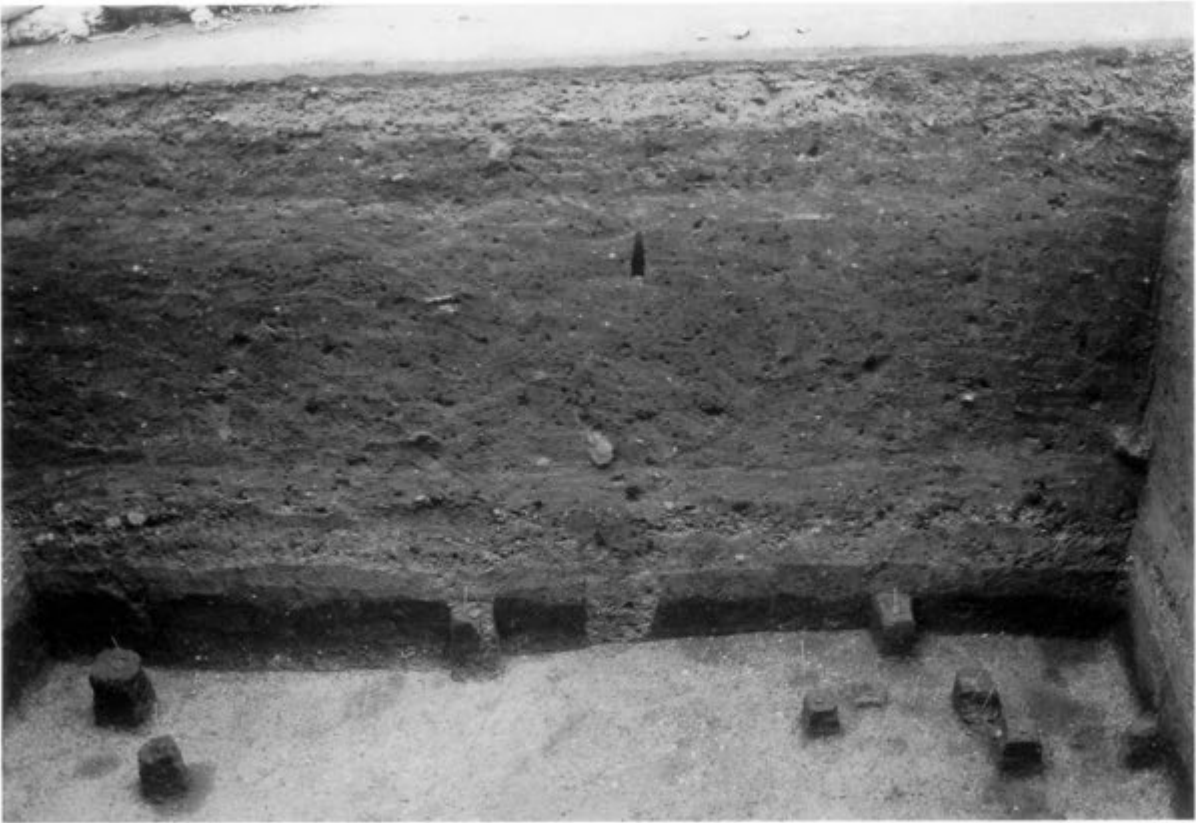
黒色土のままであるⅢb層は、弥生式土器と古墳時代成川式土器の包含層である。古墳時代の遺構としては2次調査、5次調査の際の溝があり、その中や周囲からは完形に近い土器が出土している。なかでも完形のミニチュア土器が多く出土したのはこの遺跡の特徴である。ただ、住居址が検出されていないうえに、溝自体も自然流路と見られるので、住居域がどこであるかが今後の課題として残る。また、この層からは、2次調査で在地の弥生式土器を伴う住居址が検出された。集落ではない全くの単独住居であり、その特異性が注目される。さらに、周囲で安国寺式土器も出土しており、東九州とのつながりが確認されたのは大きな成果である。そのうえ、方格T字鏡の破鏡も出土しており、南九州の弥生時代を考えるうえで重要な発見となった。

以上、この遺跡の発掘調査は多大の成果をもたらしてくれた。今後、これらの成果を解釈するために研究を積み重ね、この発掘成果を活かして旧大隅国域の弥生時代から中世を物語ることが、我々に果たされた宿題である。



第26図 本御内遺跡 第1～5次の概要図

版 圖



1 B区土層断面（北側）



2 遺物出土状況



1 壺形土器出土状況



2 手づくね土器出土状況



1 水田遺構



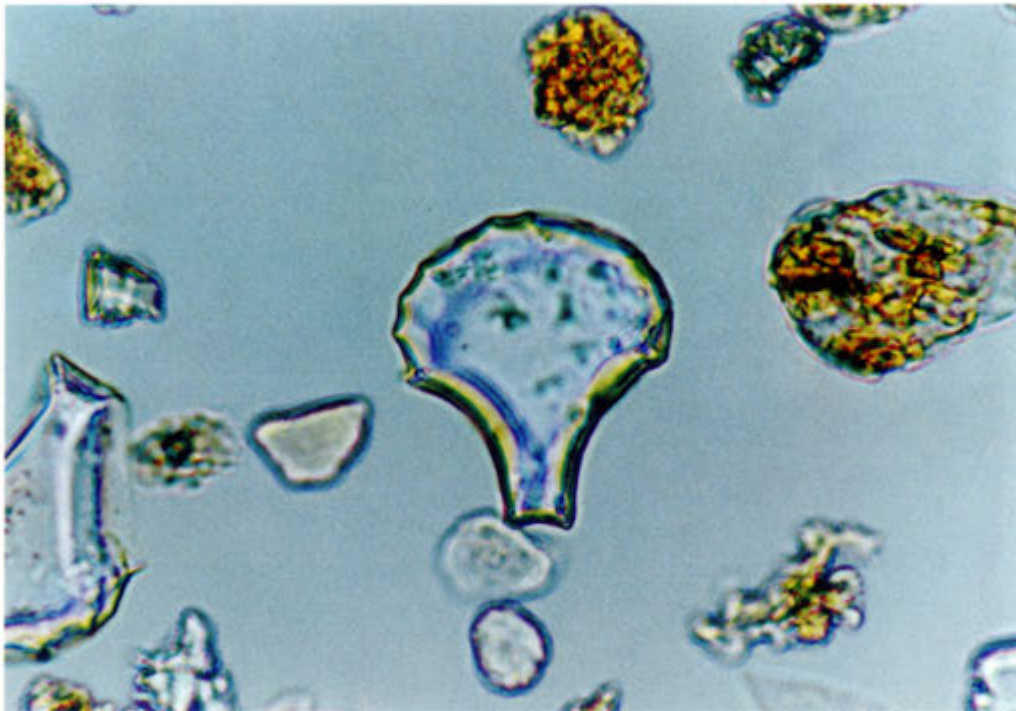
2 水田遺構内足跡



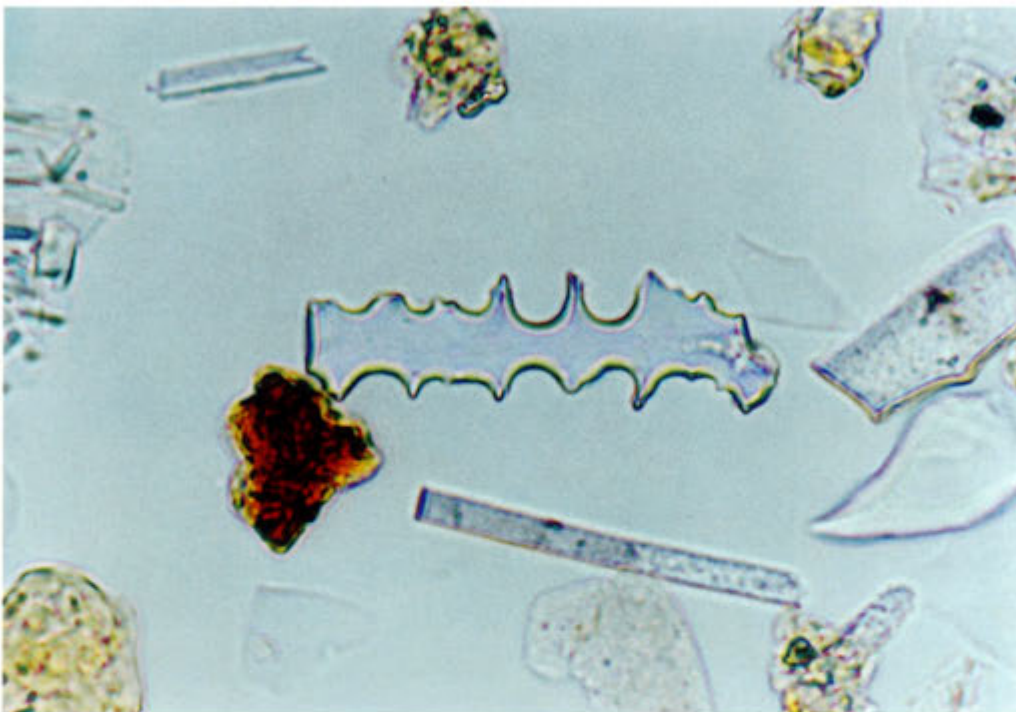
1 溝状遺構及び遺物出土状況



2 溝状遺構完掘状況

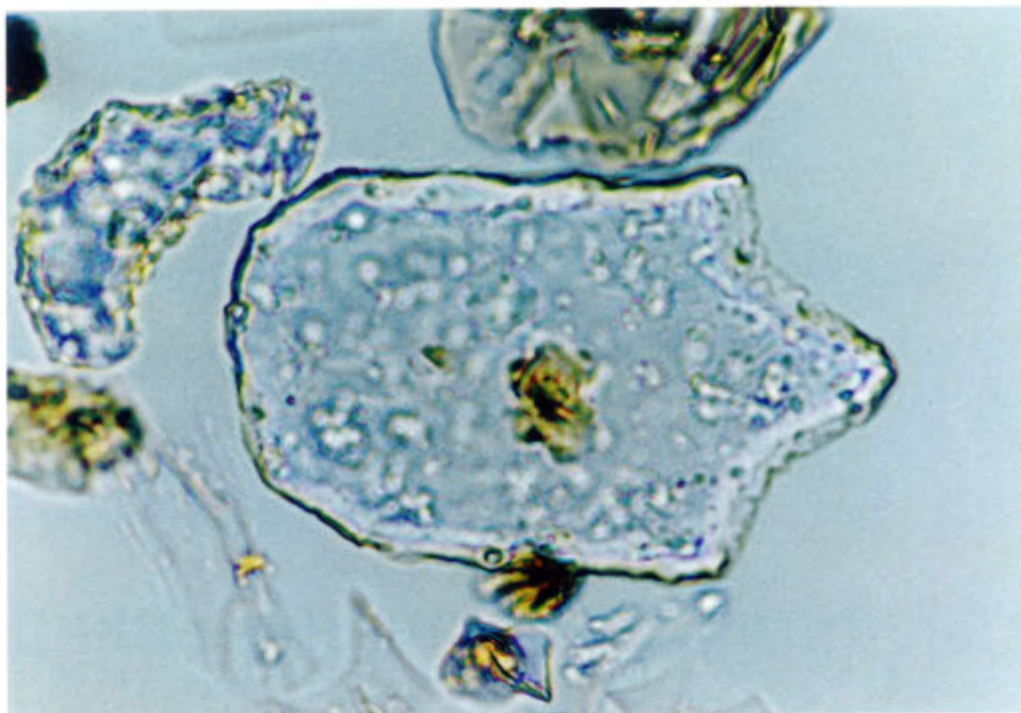


1 植物珪酸体の顕微鏡写真 (イネ)

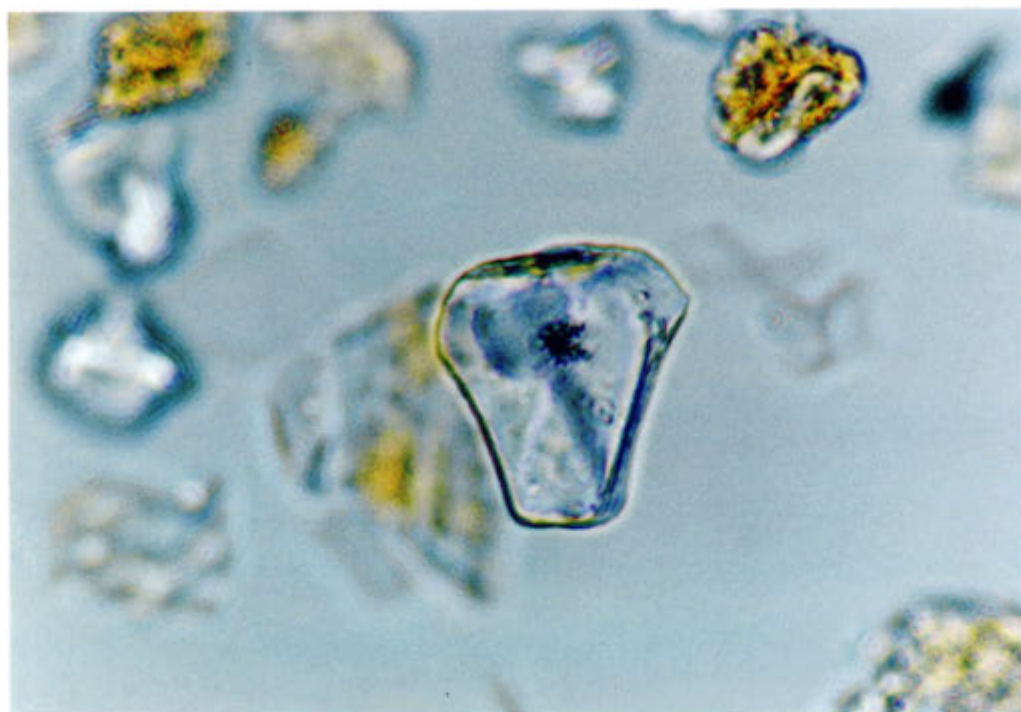


0 50 100 μ m

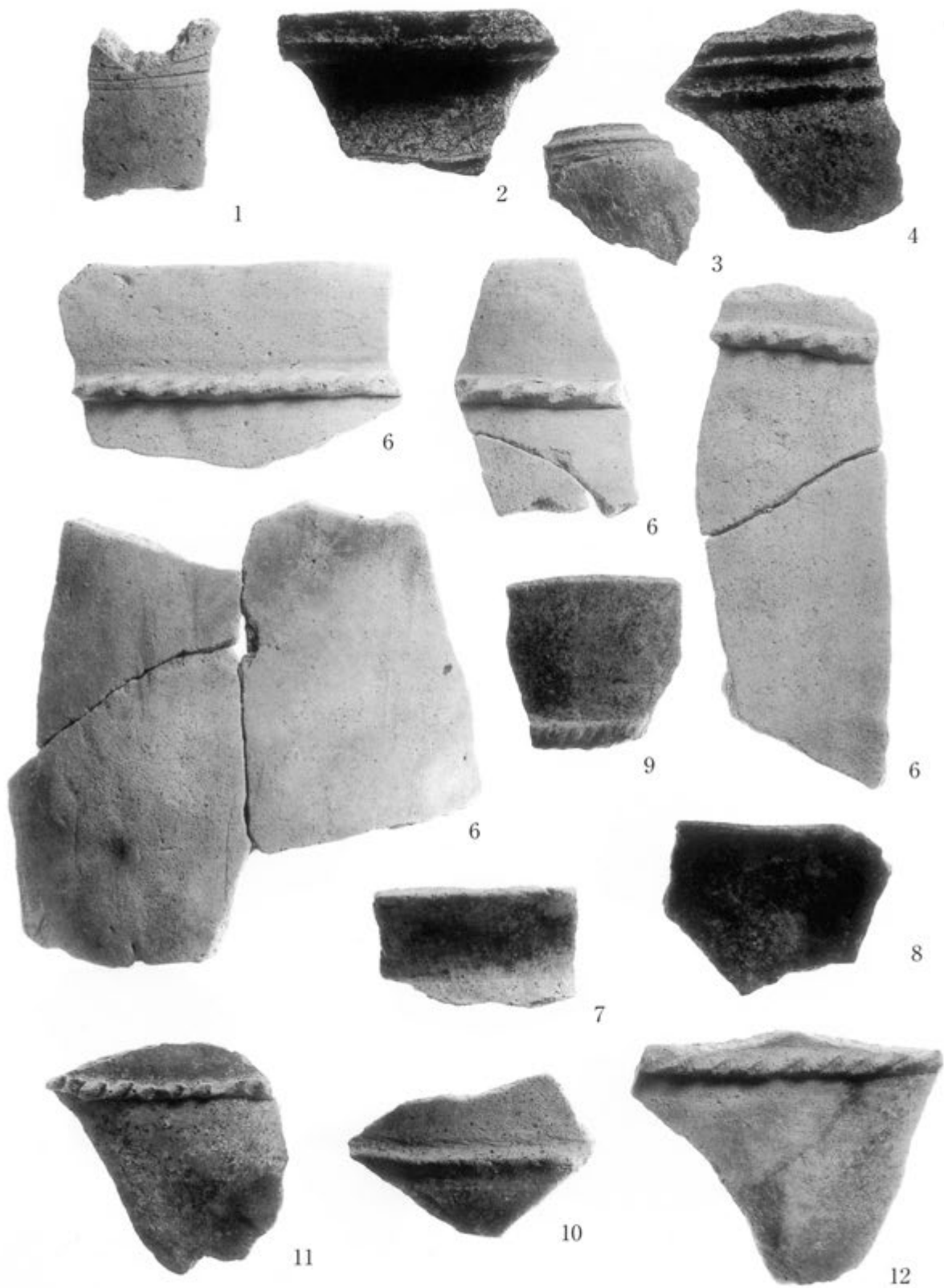
2 植物珪酸体の顕微鏡写真 (オオムギ族)



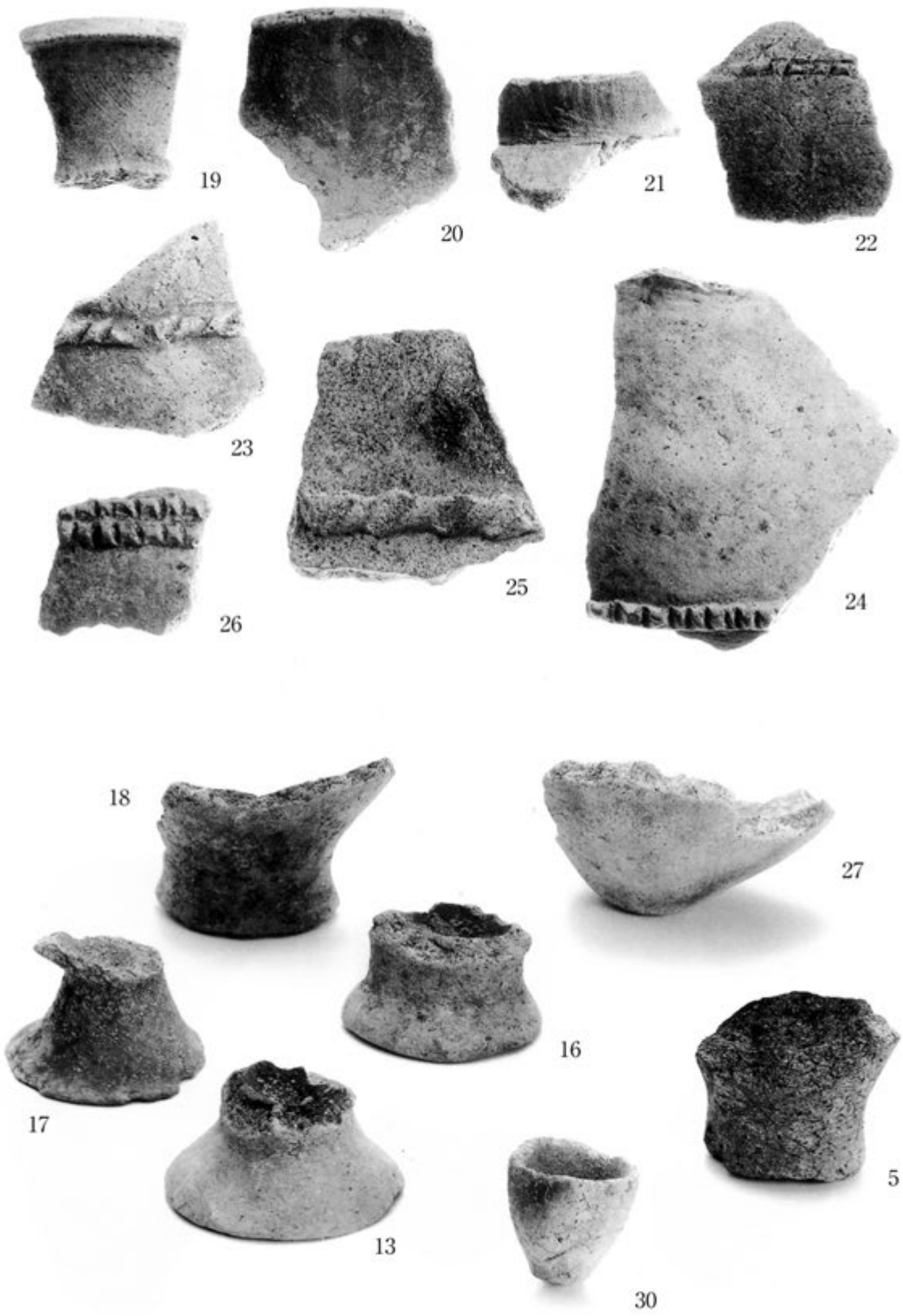
1 植物珪酸体の顕微鏡写真（ヨシ属）



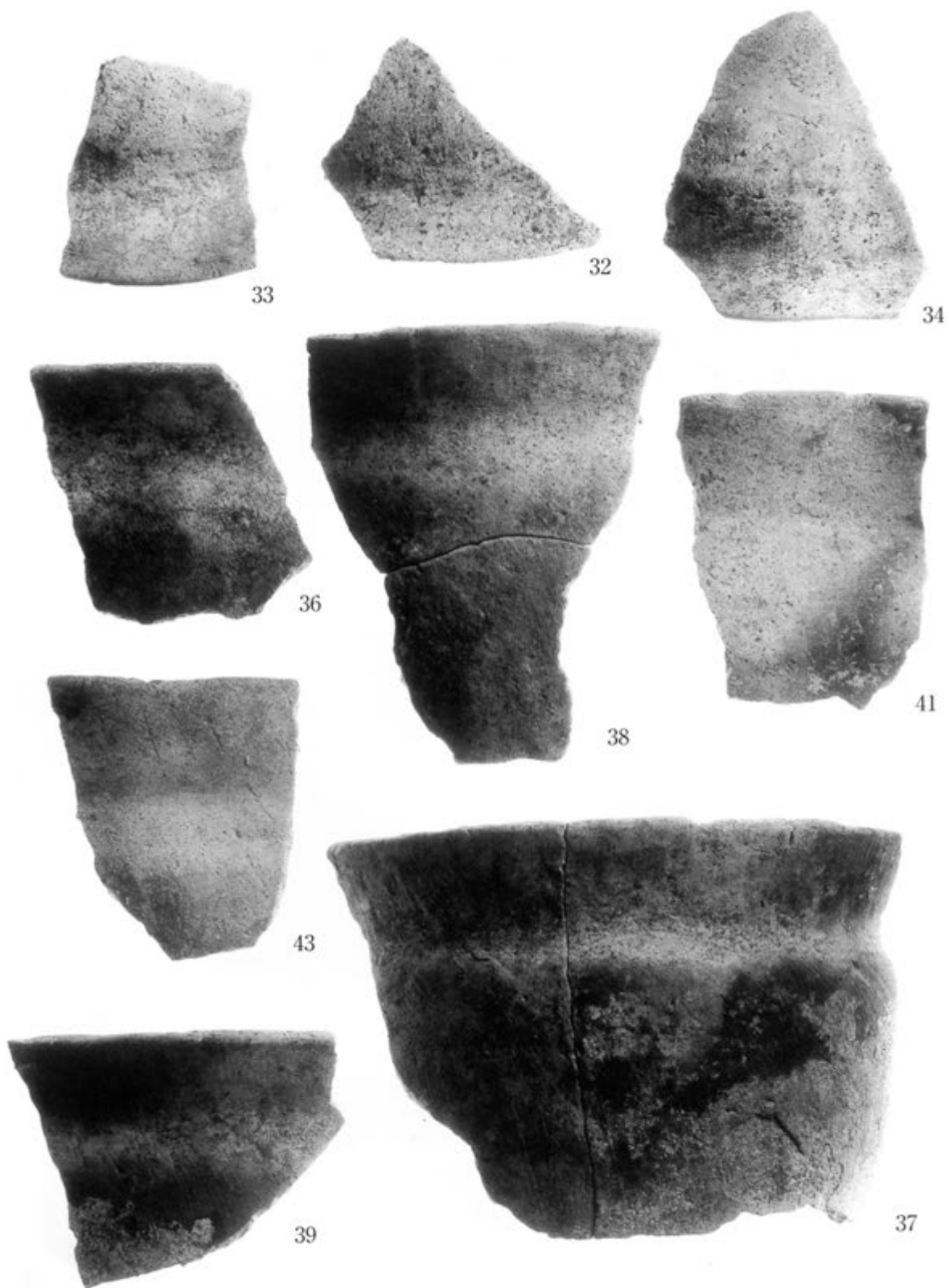
2 植物珪酸体の顕微鏡写真（ススキ属型）



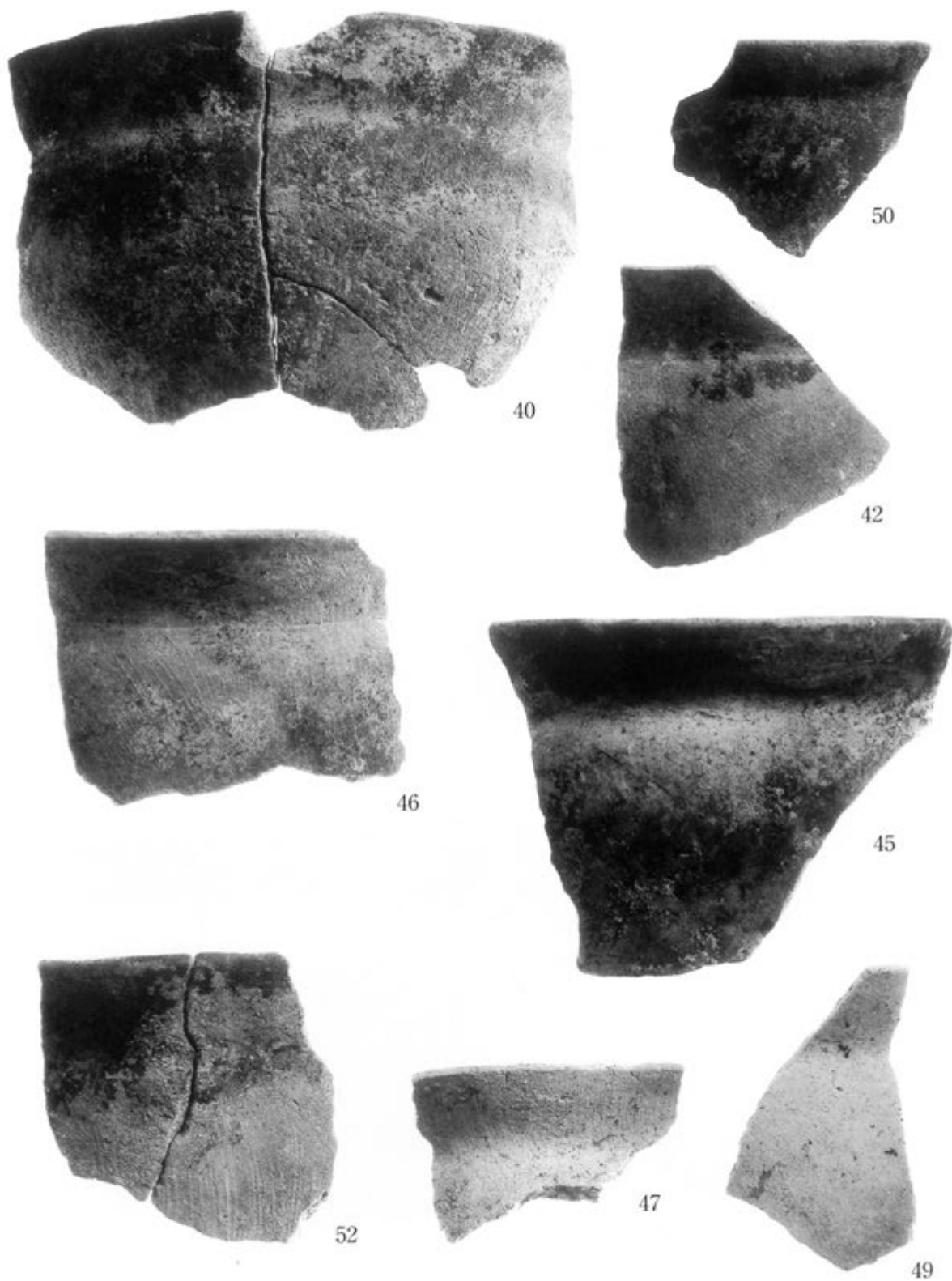
出土遺物 (1)



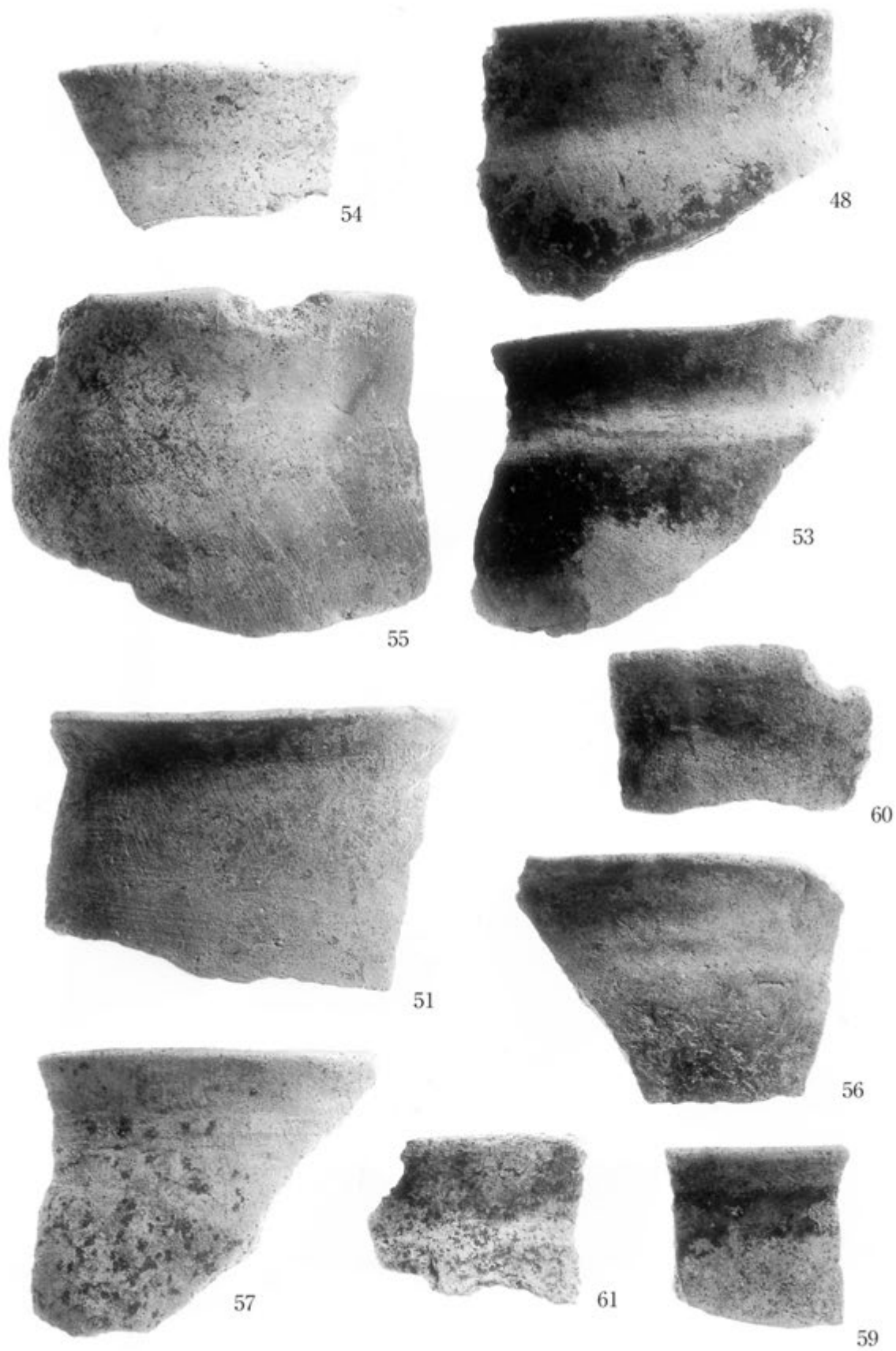
出土遺物 (2)



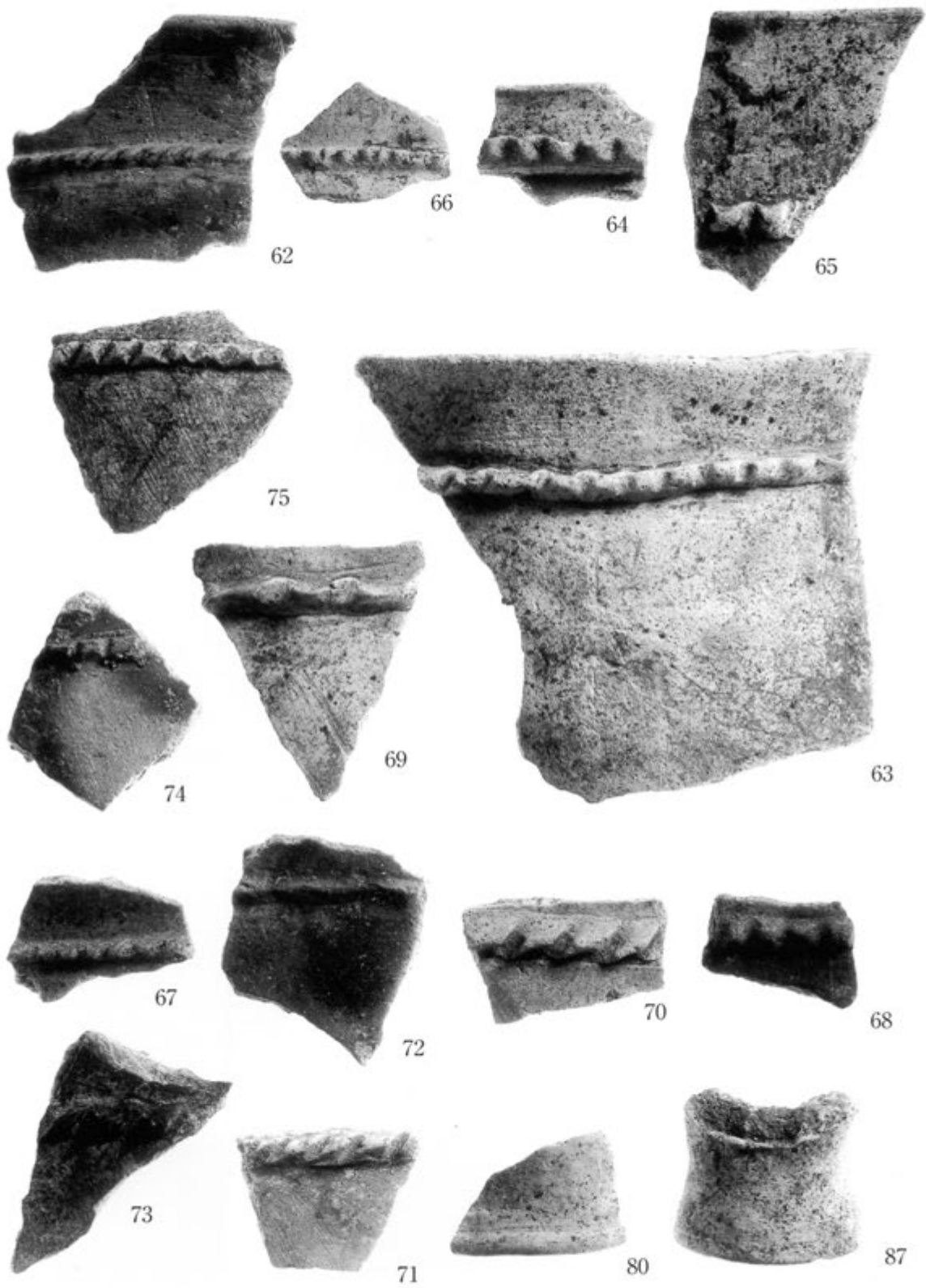
出土遺物 (3)



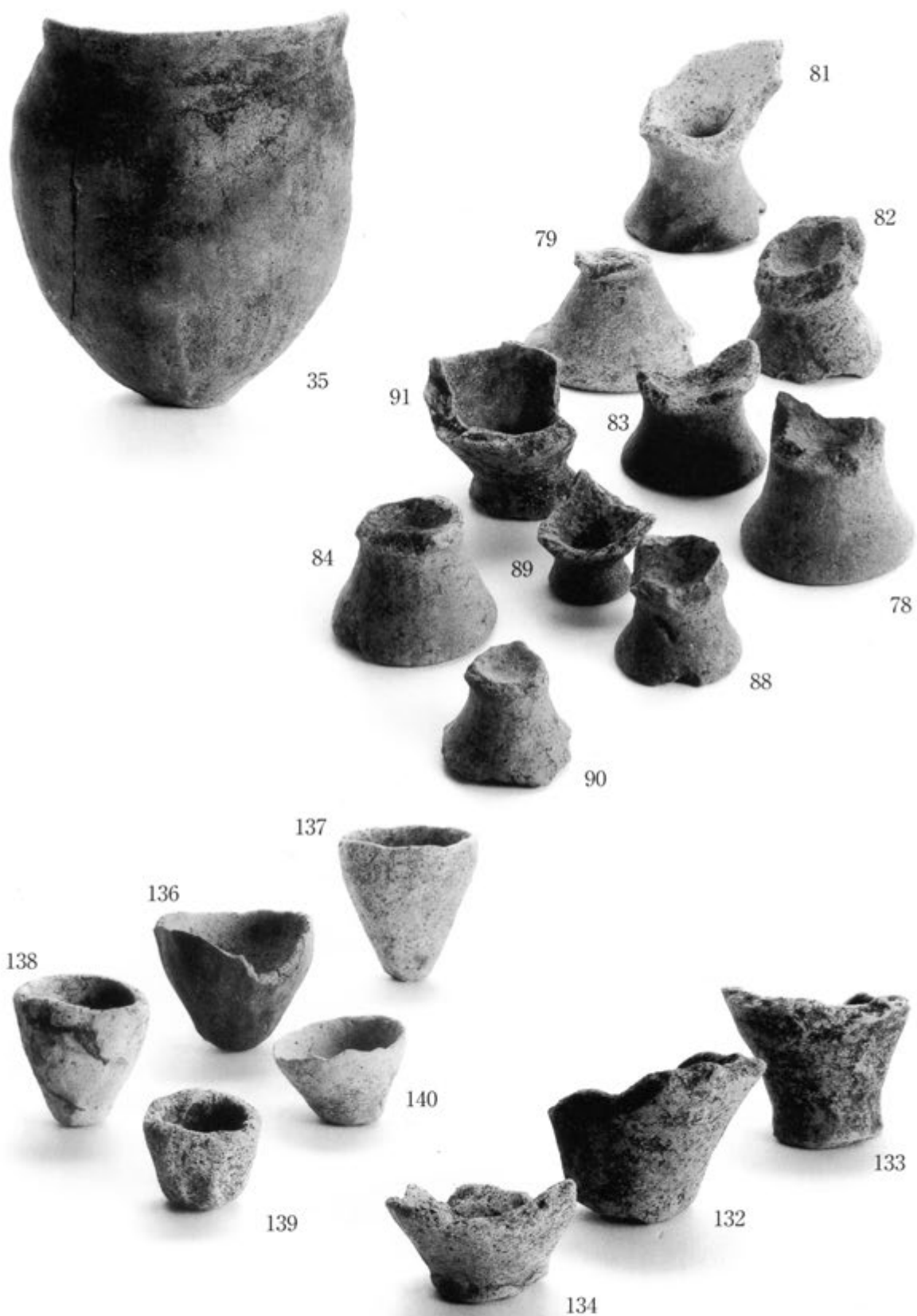
出土遺物（4）



出土遺物 (5)



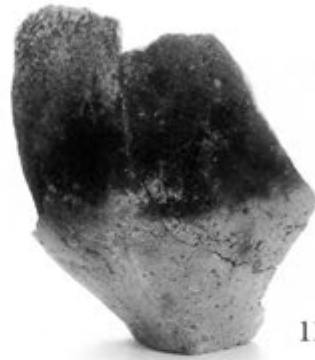
出土遺物 (6)



出土遺物 (7)



95



119



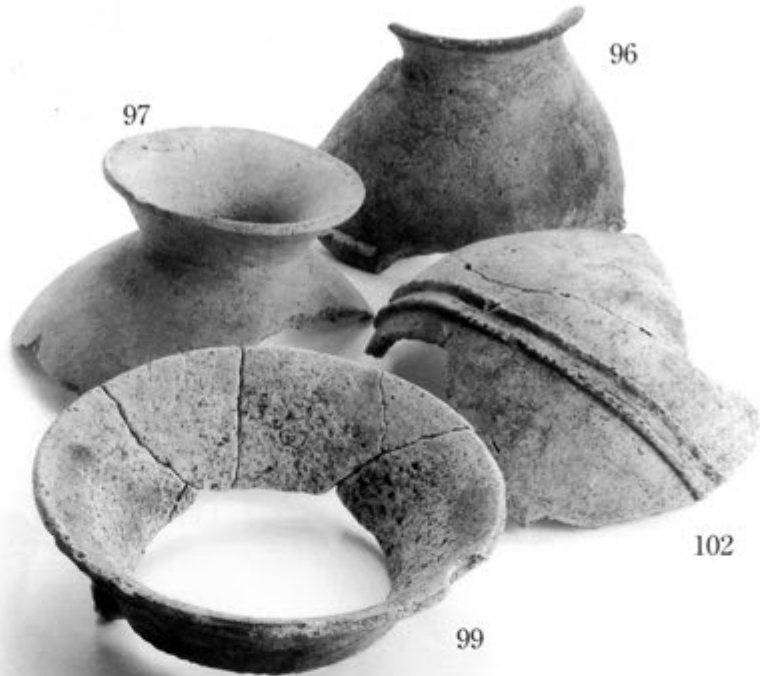
121



120



122



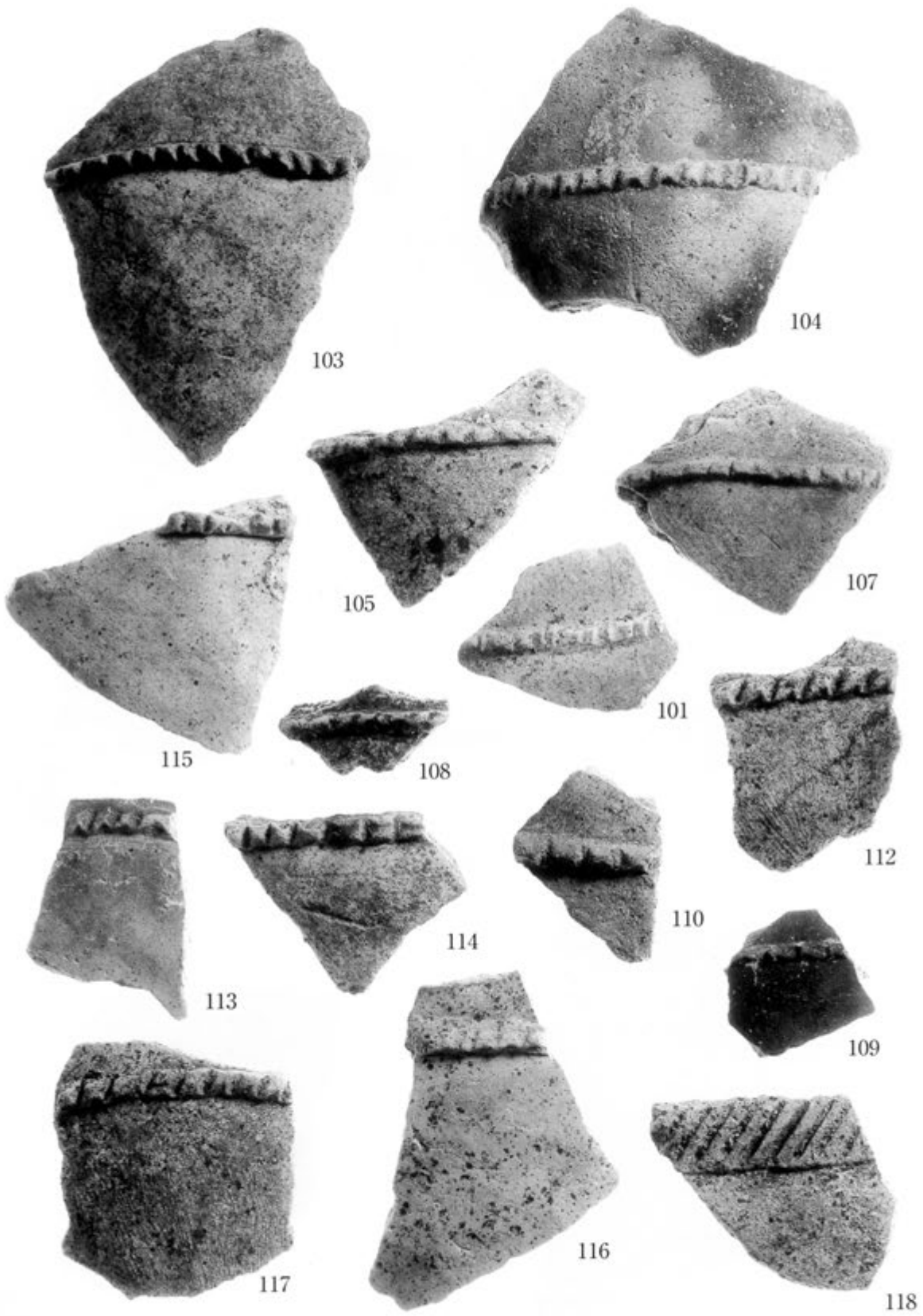
97

96

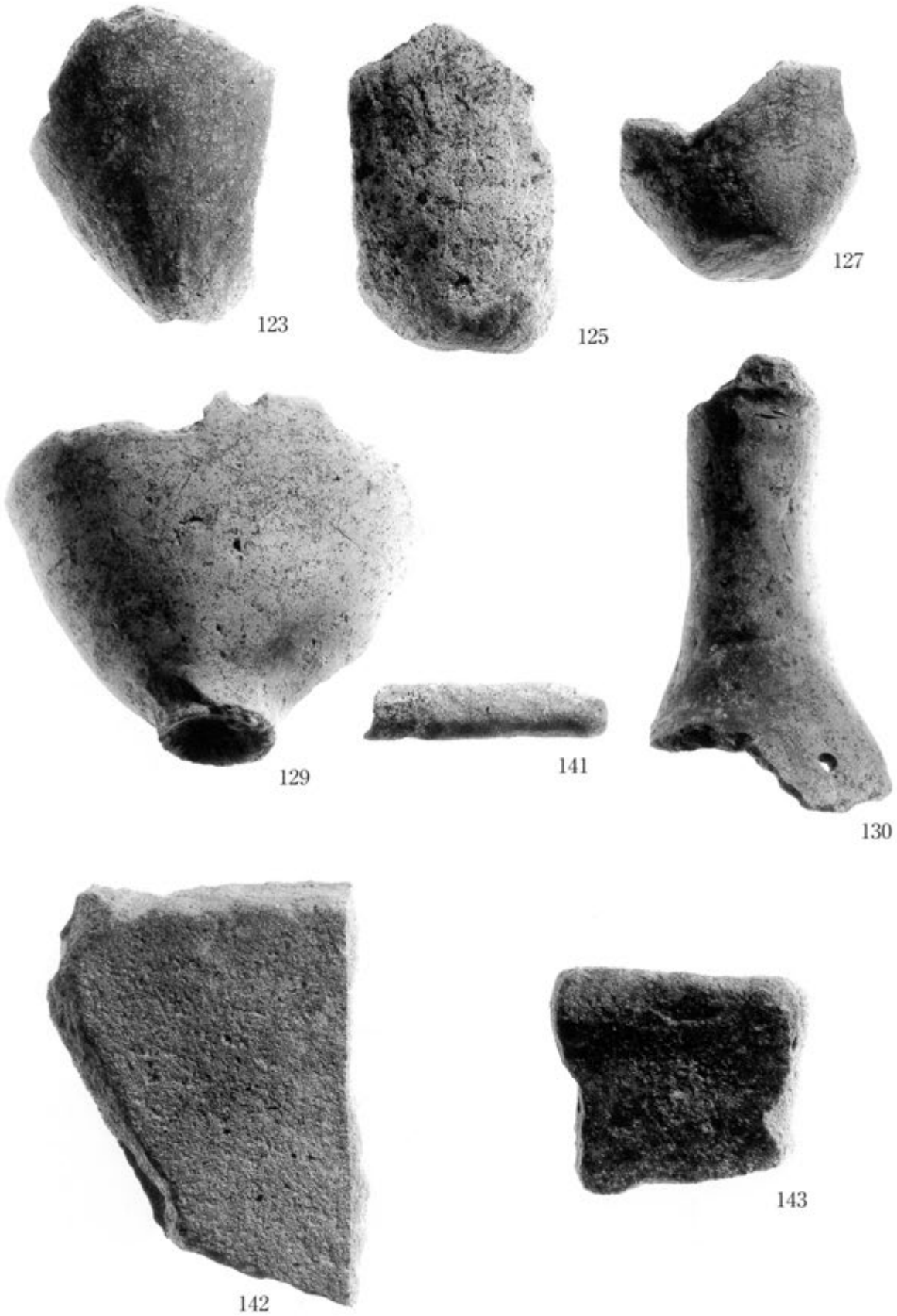
99

102

出土遺物 (8)



出土遺物 (9)



出土遺物 (10)

符 編

符 編

鹿児島県、本御内遺跡5次調査における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. 本御内遺跡5次調査におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984）。

2. 試料

試料は、AトレンチおよびBトレンチから採取された計13点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約 $40\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（ 550°C ・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（ 300W ・ 42kHz ・10分間）による分散
- 5) 沈底法による $20\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03），ヨシ属（ヨシ）は6.31，ススキ属（ススキ）は1.24，タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4. 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) Aトレンチ

成川式土器を含む溝の埋土（試料1～4）について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、試料1では密度が5,200個/gと高い値である。このことから、当時は溝の周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で溝内にイネのプラント・オパールが混入したものと推定される。

2) Bトレンチ

II a層の直上層（試料1）からIV層（試料9）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、II a層の直上層（試料1）、II a層（試料2, 3）、II c層（試料5, 6）では密度が5,000個/g以上と高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

II b層（試料4）、III層（成川式土器包含層、試料7, 8）、IV層（試料9）では、密度が1,000個/g前後と低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) オオムギ族について

BトレンチのII a層（試料2, 3）では、オオムギ族（穎の表皮細胞）が検出された。ここで検出されたのは、ムギ類（コムギやオオムギ）と見られる形態のもの（杉山・石井, 1989）である。密度は1,500～2,300個/gと比較的低い値であるが、穎（粃殻）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。これらのことから、同層の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が高いと考えられる。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、Aトレンチの成川式土器を含む溝埋土では、ヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。また、BトレンチのⅣ層～Ⅱc層ではヨシ属が優勢であり、ススキ属型も多くなっている。

以上のことから、成川式土器包含層およびその下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたものと推定される。また、周辺にはススキ属などが生育する草原的なところも分布していたと考えられる。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、BトレンチではⅡa層とその直上層およびⅡc層からイネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、Ⅲ層（成川式土器包含層）などでも稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、Ⅱa層ではムギ類（コムギやオオムギ）が栽培されていた可能性も認められた。Aトレンチでは成川式土器を含む溝埋土からイネが多量に検出され、溝の周辺で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

文 献

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－. 考古学と自然科学, 20, p.81-92.

杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村, F P直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析. 日本第四紀学会要旨集, 19, p.94-95.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 鹿児島県、本御内遺跡におけるプラント・オパール分析表

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料		Aトレンチ									Bトレンチ								
		1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7	8	9							
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	52	15	8	15	60	67	98	8	91	52	15	8	7							
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	15	52	38	53				8	23	15	30	15	52							
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	37	37	30	8	22	15	8	15	76	67	173	98	52							
タケ亜科	Bambusoideae (bamboo)	7				82	22	60	38					15							
オオムギ族 (穎の表皮細胞)	Wheat husk Phytolith					15	23														

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.54	0.44	0.22	0.44	1.76	1.98	2.89	0.22	2.68	1.54	0.44	0.22	0.22
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.95	3.31	2.39	3.34				0.47	1.44	0.94	1.90	0.95	3.30
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.46	0.46	0.38	0.09	0.28	0.19	0.09	0.19	0.94	0.84	2.15	1.21	0.65
タケ亜科	Bambusoideae (bamboo)	0.04				0.40	0.11	0.29	0.18					0.07

※試料の仮重比を1.0として算出。

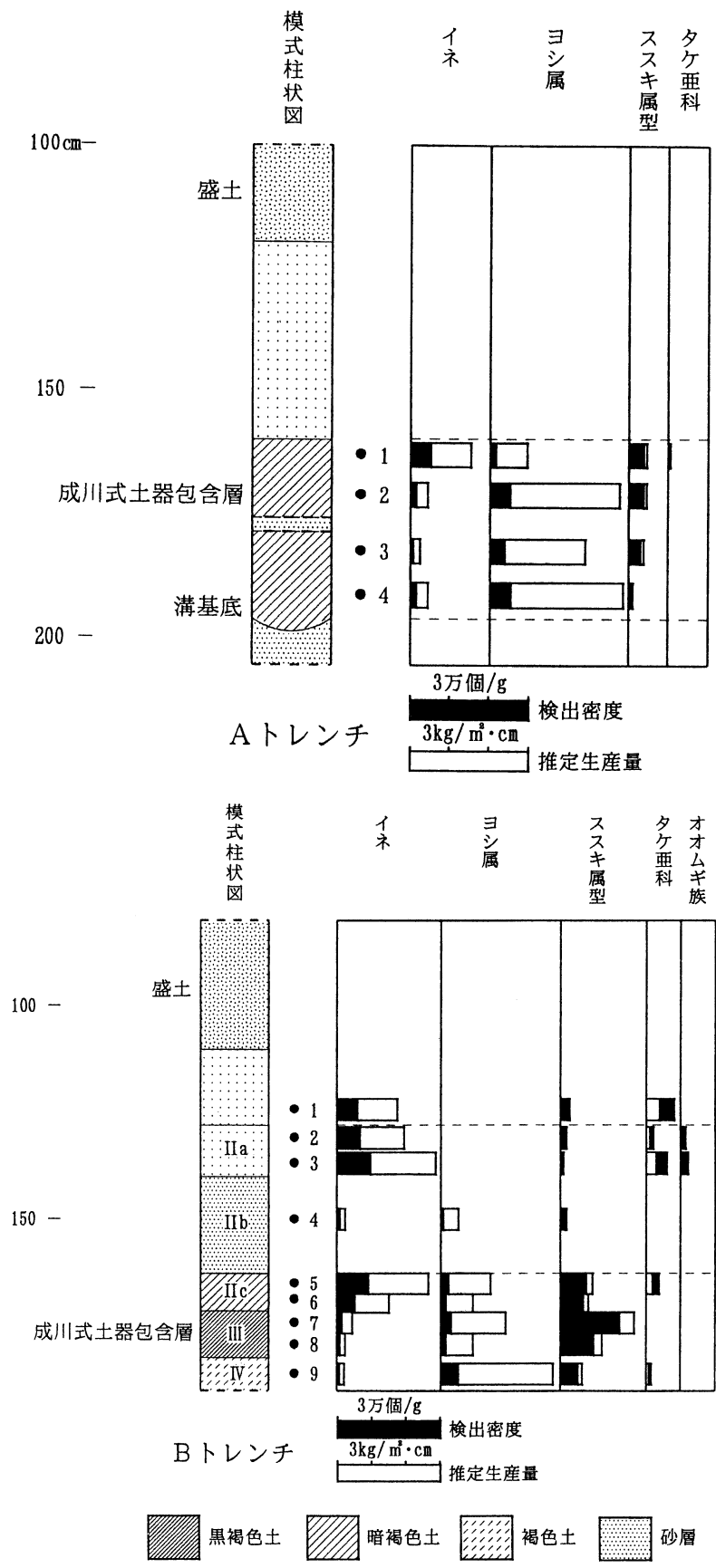


図1 鹿児島県、本御内遺跡5次調査におけるプラント・オパール分析結果

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	B	6
2	イネ	B	9
3	イネ	B	2
4	オオムギ族（穎の表皮細胞）	B	2
5	ヨシ属	B	5
6	ススキ属型	B	1
7	ネザサ属型	B	3
8	ブナ科（シイ属）	A	1
9	ブナ科（シイ属）	B	4
10	ブナ科（アカガシ亜属？）	A	1
11	クスノキ属	B	3
12	マンサク属（イスノキ属）	A	1

II. 本御内遺跡 5 次調査における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	B トレンチ 柱穴内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 B P)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 B P)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No. 1	950 ± 40	-26.5	930 ± 40	交点: 1050, 1095, 1140 1 σ : A D 1030 ~ 1170 2 σ : A D 1015 ~ 1205	132527

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年 A D) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は、標準物質 (P D B) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、暦年代 (西暦) を算出した。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定、サンゴの U- T h 年代と ^{14}C 年代の比較により補正曲線を作成して暦年代を算出した ("INCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率)・2 σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（45）

鹿児島県立国分高等学校浄化槽設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

もと お さと
本 御 内 遺 跡

発行日 平成14年 3月31日

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地

Tel 0995-65-8787

印刷所 株式会社あすなろ印刷

〒890-0041 鹿児島市城西2-2-36

Tel 099-250-7033